「俺の酒が呑めない」上演台本　作：古川貴義

■舞台

福島県耶麻郡にある、小さな造り酒屋、徳一酒造(とくいっしゅぞう)。
とても小さな酒蔵で、切り盛りする蔵元、玄戸家の住居の一部が事務所となっている。
事務所兼休憩室のようで、務めている杜氏や蔵人が、この事務所で食事することもあるようだ。
奥には、酒蔵や麹室に続く廊下がある。大きな酛桶(もとおけ/タンク)が見えているかもしれない。

取材協力：磐梯酒造、大和川酒造、末廣酒造

■登場人物

・玄戸賢太郎・・・兄。四十五歳。
・玄戸希穂(きほ)・・・・妹。三十七歳。
・玄戸寛・・・・・妹の夫。四十三歳。役場勤め。
・玄戸一朗(いちお)・・・・父。七十歳。
※母は入院している。出演はしない

・牛島忠道・・・・ベテラン杜氏。七十二歳。
・尾辻浩平・・・若い蔵人。二十五歳。

・川澄多紀・・・農協の担当者のおばさん。五十九歳。
・乾治・・・・・米を納品している若い農家。二十九歳。
・乾操子・・・・米を納品している若い農家の妻。三十歳。

・榊奈緒美・・・近所に住む、賢太郎の友人。四十五歳。
・田知本譲・・・東京都の大手居酒屋チェーンの営業担当者の女。三十九歳。

■シーン構成

1．帰還　精米　／　十一月末。昼頃。
2．居所　麹造り　／　十二月上旬。夕方。
3．献言　酒母(しゅぼ)　／　十二月中旬。昼過ぎ。
4．仇敵　造り　初添　／　十二月下旬。夜。
5．渉外　造り　仲、留　／　一月中旬、夕方。
6．係累　立春朝搾り　／　二月四日。立春。早朝。
7．狂奔　甑倒し(こしきだおし)　／　三月末。昼。
8．九献　皆造り(みなつくり)　／　四月初旬。午後。

●1．帰還　精米

十一月末。昼頃。

徳一酒造では、今年も寒造りが始まった。
銘柄『徳一』の大吟醸用の精米が行われているようだ。

玄戸希穂(くろときほ)が、立春朝搾りまでの日数を計算している。
また、紙資料を見ながら、昨年の納品数と今期の納品予定の量を計算している。
希穂の父、玄戸一朗(くろといちお)が入ってくる。

希穂　どう？
一朗　・・・うん。
希穂　、え、あんまし良ぐないの？
一朗　・・・。
希穂　米？
一朗　、米がね。
希穂　、え？

乾治(いぬいおさむ)と乾操子(いぬいみさこ)が、一朗を追うように入ってくる。
二人とも、良い笑顔をしている。

一朗　抜群に、
希穂　あ、
一朗　良い。
希穂　うん、乾さんの顔見だらわがった。
治・操子　(笑)
一朗　今年もよぐでぎでっこど。
治　安心しました。
操子　ね。
希穂　良がったですねぇ。
治　えぇ。
一朗　ただね。
操子　ん？
治　え？
希穂　・・・何？
一朗　酒米(さがまい)が、抜群に良いあまりに、
希穂　うん。
一朗　逆(ぎゃぐ)に、麹の塩梅がちっとむずがしいんじゃねーがと思ってよ。
治　え？
希穂　あー。
一朗　うん。
操子　あの・・・、
希穂　乾さんちの米が、

操子　はい。
希穂　良過ぎだんだって(笑)
一朗　抜群に。
操子　・・・。
治　あのそれは喜んで良いところなんでしょうか？
希穂　もちろん！！
一朗　忠さん何とがしてくれっから。
治　ああ、
一朗　むしろ張り合い出で良いんでねえの？　普段、ろぐでもねえ米がら何とが美味い酒造らねばっつって戦ってんだがら。
希穂　あぁー。良ぐでぎだ米がら酒造って美味い酒でぎながったら、名折れだもんねえ。
一朗　おぉ。忠さんなら大丈夫だべぇ。
希穂　安心しっせ、会津一だがら。
操子　え、会津一なんですか？
一朗　酒の量がな。
希穂　(笑)
治　それ、は、
希穂　杜氏として、でしょ(笑)
治　え、造ってる量が、ってことですか？
希穂　え？
治　酒の量って、造ってる、
希穂　あぁあぁ違う違う。
一朗　飲む量。
治　ああ。あ何だ色んな酒蔵行ってるのかと思っちゃいました。
一朗　専属、うぢ専属でやってくっちぇんの。
治　へぇー。
希穂　忠さん飲む量多いんだげど、んまだがらそんで肝臓フォアグラみだいになってるみだいなんだげど、でも・・、腕は確かだがら。
治　あ、はい。
一朗　寒仕込みのうぢは飲まねえしな。
希穂　そだねー。
操子　あ、偉い。
一朗　ん、ま、まがしといでくろ。
治　あ、はい、よろしくお願いします！
操子　お願いします！

一朗、精米の様子を見に戻っていく。

治　さすがだね。
操子　え？
治　さすが、
操子　何が？
治　さすがっていうか、その、さすが、・・・さすが。

希穂、乾夫妻を嬉しそうに眺めながら、

希穂　三年目でしたっけ？
治　はい足かけ。
希穂　よぐやってっこど、やったごどながったんでしょ？それまで。
治　はい。
希穂　凄いよー。
操子　酒米って道があったんだなって、
希穂　うぢも助かってます。
治　あでもこいつんちの実家は、結構、
操子　あ、
治　畑ですけど、やってまして、
操子　そんなやってるってほどやってないんです、
治　えやってんじゃん。
操子　家庭菜園でしょ。
治　でもやってんじゃん、
操子　屋上だけなんです。
治　やってるよ。
操子　だからほんのちょっとだから、出荷とかしてないし、
希穂　え屋上で？
操子　はい、七ヘクタールくらい？
希穂　七ヘクタール！？
操子　はい、
希穂　屋上に？
操子　はい。
希穂　広！
治　広いんですよ。
操子　でも出荷してないんですよ？屋上だけで。
希穂　え、でも、屋上があんですねー。
操子　出荷は、あ、マンションなんですけど。
治　親が持ってるマンションで。
希穂　東京で。
操子　はい東京ですけど、
希穂　良いですねー。
操子　出荷とかそういうレベルじゃないんですよ？本当。
希穂　持ちマンションじゃないですか、持ち家どころか。
操子　ま、はあ。
希穂　へぇー。七ヘクタール・・・。
治　えでも希穂さんも、
希穂　え？
治　ここ、持ち蔵じゃないですか、酒蔵。
希穂　持ち蔵って(笑)
治　ねえ？
希穂　でも私が買ったわげじゃないですし、

操子　それは私も、親が、たまたま、
希穂　屋上だってありませんし、
治　えーでも、ここは、先祖代々の、何代目でしたっけ？お父さん、
希穂　五代目。
治　で希穂さんで、六代目でしょ？
操子　えーでも私もマンションなんかより蔵欲しかったって思いますよ？
希穂　、え、本気で言ってます？
操子　、え？
希穂　、あ、ごめんなさい。
治・操子　・・・。
希穂　たまたま、酒蔵に生まれちゃった、ってだけですよ。
治　、あー、
希穂　操子さんとおんなし。たまたま、マンション持ってる親んとごろに生まれた。たまたま、酒蔵やってる親んとごろに生まれた。そんだけですよ(笑)
治・操子　(苦笑)

事務所の出入り口から、農協の担当者、川澄多紀(かわすみたき)が訪れる。

多紀　こんちはー。

希穂、資料を机にしまい、カギを掛ける。

治・操子　あこんにちはー。
多紀　あーどうもー乾さーん！
治　お世話になってますー。
多紀　達者～？
治　あ、
多紀　あら希穂ちゃん髪切った？
希穂　切ってないです。
多紀　えどごで切らったの？ポワソン？
希穂　だがら切ってないですって。
多紀　なんだ切ってないの？
希穂　はい(笑)
多紀　あら何だー、見間違い？
希穂　多紀さんが行ってきたんでしょ？
多紀　そうなのポワソン。まー、へったクソ。先っぽも揃えらんないんだがら信じらんないわ、ほんと。パーマにしたわ。
希穂　あ、そんで。(その髪型)
多紀　良いべ？
希穂　、良いですね。
多紀　何今のなんか間あったよねぇ、(治と操子に)ねえ？
操子　あ、
多紀　こないだ貰った「ひやおろし(十一月に搾って瓶詰した酒)」、
希穂　あはい。

多紀　・・・美味しかった。
希穂　あそうですか、どうもありがとうございます。
多紀　いえいえこちらこそありがとうございますですよ。
希穂　や、お世話になってますから。
多紀　美味しかったー、(治と操子に)私飲めないんだげどね？
治　あそうなんですか。
多紀　まほぼ旦那が飲んじまったんだげど、飲めない私でも美味しいって思っちまうんだがらこれ本当に美味しいっつうごどだよね。
操子　ま確かに。
希穂　多紀さん、
多紀　やーしかし、乾さんちも、よぐ吟小町(貴重な酒米)作ったよねえ。
治　やそれは、
多紀　やめどげ、っつったんだよ？私は。でぎないよーそんな簡単なもんじゃないよー酒米作りは、っつって。作っちゃうんだもん。びっくりした。あーびっくりした。
治　そこは、希穂さんが、
多紀　え？
治　僕らに賭けてくれたお蔭です。(操子に) ね。
操子　ん、うん。
多紀　何言ってけつかんのー、
治　え？
多紀　私が、希穂ちゃん紹介したお蔭だべした。
治　あ、そうですね！
多紀　(操子に) ねえ？
治　そうでした！
希穂　そうですか？(笑)
多紀　った、もー、にべもない。
治・操子　(苦笑)
多紀　じゃね。

と、多紀、帰ろうとする。

希穂　え、何しに来たの？
多紀　あそうだった忘れでだ。

一朗、戻って来て、渋い顔をしながら、室内にある車のキーを取りに向かう。

多紀　あーこんちはー。
一朗　おーこんちは。
多紀　なーにカメムシ食ったみだいな顔して。
一朗　あぁ？
多紀　はいごめんなさいー。
希穂　あ、病院か。
一朗　うんー。
希穂　？　何かあった？

一朗　いや・・・。
希穂　うん。
一朗　忠さんがよ。・・・これじゃ吟醸にでぎねえ。っつうんだよ。
治　え？
一朗　麹にしたどぎに、芯が溶げっちまー、って。
治　え、それは・・・、
一朗　削っだら割れっちまうって。米が良過ぎっから。
治　それ、
操子　仕込めないってことですか？
一朗　んー。色々試してみでくっちぇんだげども。
治・操子　・・・。
多紀　え忠さんでも何ともなんねの？
一朗　米が、良いがら。
多紀　米が良いがらって、良いなら良い酒にでぎんでないの？
一朗　そごは、生き物だがら。
多紀　ああ。
一朗　食って美味い米と酒にして美味い米は違ぁべした。
多紀　え、それは知ってっけど、
一朗　勿論、酒にすっと美味い米、のはずなんだよ？乾さんどごの吟小町は。んでも、米の時点で良ぐっても、麹菌かげで米麹になってがら、醪（もろみ）んなってがら、どうなっかっつーのは、そごは、忠さんと微生物信じるしかねーべ。

間。

希穂　じゃあ、さ。
一朗　ん？
希穂　純米酒にしない？　削り過ぎなげれば芯も溶げないでしょ？
一朗　んだごど言っても、そんな簡単に行ぐもんじゃねえべよ。
希穂　うぢなんかでっかい蔵ど違って、大吟醸作れながったがらって文句言われないでしょ。今年は出来ませんでしたーっつって。
一朗　だがら、税務署どうすんのよ。酒税申告、
希穂　造る量変えねえんだがら何とが
一朗　違う酒造るっつうごどになったら、
希穂　何とがします！って。
一朗　・・・。
希穂　純米作れんだし。そういう融通利ぐとごがうぢみだいな小さい蔵の良いとごでしょ。
一朗　だごと言ったって、
希穂　忠さんに言ってくる！
一朗　希穂！

と、希穂、酒蔵に行ってしまう。
治も、希穂を追うように酒蔵に向かう。

操子　治くん？

治　謝ってくる！

と、治、希穂を追いかけて出て行ってしまう。

一朗　・・・。
多紀　謝ってどうなるもんでもあんめえに・・・。
操子　すいません。
一朗　あぁ？
操子　うちが、良い米作っちゃったばっかりに・・・。
一朗　乾さんは何も悪ぐねえべよ。
操子　・・・すいません。
一朗　ただ、良い米作っちまったっつうだげで。わりいのは、それにすぐ対応でぎねえオラだぢだべ(笑)
操子　や、そんな・・・。
多紀　そんでも、希穂ちゃんが見でくれるようんなって、ずいぶん柔軟になったんでねえの？昔と比べだら。（操子に）ねえ？
操子　？　あ、ねえ。
多紀　うんー。
操子　そうなんですか？
多紀　え何、知らねえのに同意した？今。
操子　あすいません、ほんと、まだぺーぺーで。
多紀　この、東京人！（笑）
操子　あ、ははは・・・。
一朗　まあ、そうがもしんねえな。
多紀　あ、ねえ。売上だって。
一朗　あん頃とは景気が違うでしょうよ。
多紀　ねえ。考えらんないねえ。こーんな日本酒が売れる時代が来るなんて。
一朗　今だげだべ。
多紀　まだ続ぐでしょー。
一朗　だがら、たくさん売れでるわげじゃねえんだよ？毎年楽しみにしてくっちぇるちっちゃなお得意が増えだっつうだげで
多紀　分がってっけどさ、それでおまんま食えでんだがら。
一朗　・・・。
多紀　継いでもらって、本当良がったねえ。
一朗　・・・。

一朗、出ていこうとする。

多紀　どごさ行ぐの？
一朗　病院。
多紀　ああ。

一朗、出ていく。

多紀、操子、二人きり。

間。

多紀　(なぜか同意を求める)・・・ねえ。
操子　あ、はい。
多紀　・・・。
操子　・・？
多紀　入んの？
操子　はい？
多紀　共済。
操子　あ、それ、
多紀　早いうぢに入っといだ方が良いんだよ?絶対。
操子　ＪＡなんですもんね？
多紀　共済だがら、保険とはまだちょっと
操子　生保は入ってるんですけど、あの普通の、普通の保険ですけど、
多紀　車は？
操子　自動車も、
多紀　か
操子　火災も。
多紀　・・・これがら子供だって作るんだろうし、ねえ？
操子　ええ・・・。
多紀　いぐらよ？
操子　え？
多紀　月額。いぐら払ってんの。
操子　えーと・・。
多紀　・・・希穂ちゃんもいづんなったら作んだべね。
操子　は？
多紀　子供。
操子　あ、ああ。
多紀　そろそろ賞味期限切れでしょうよ。三十過ぎだら萎む一方だよ？
操子　あ、
多紀　旦那あんなに性欲強そうな顔してんのに。
操子　ねえ。(適当に話を合わせた)
多紀　嘘、お宅も思ってだ？
操子　あ、あ、・・・。

多紀、右手を差し出す。

多紀　握手〜。
操子　あ、あ、

多紀、操子、握手。

玄戸賢太郎(くろとけんたろう)、事務所入口から入ってくる。身なりが非常に汚い。

多紀、操子、訝しげに見る。

賢太郎　わ。

多紀、操子、握手をしたまま、訝しげに会釈。

賢太郎　こんちは。
多紀　こんちは。(操子に) 誰？
操子　知らないです。(賢太郎が見ていることに気付き) あ、
多紀　(握手を解いて)なんか、見学とがですか？
賢太郎　あーいや、・・・みんな酒蔵ですか？
多紀　みんな？
賢太郎　はい。
多紀　みんなっつわっちぇも、お宅様の考えるみんなと、私の捉えるみんなが同じみんなっつう保証はどごにも

多紀が話し終わる前に、賢太郎、酒蔵の方へ向かっていく。

多紀　あ、ちょちょちょちょ！

賢太郎、振り返る。

多紀　今みんな、立て込んでっから！
賢太郎　、息子です。
多紀　？　えぇ？
賢太郎　ここの。
多紀　？　誰の。
賢太郎　(笑)　一朗の。
多紀　一朗さんの？
賢太郎　賢太郎です。
多紀　賢太郎？
賢太郎　はい。
多紀　(操子に)え？賢太郎なんて居だ？
操子　や私は、
多紀　(賢太郎を見て)えぇ？
賢太郎　長男坊。
多紀　？　どごの？
賢太郎　ここの。
多紀　(操子に)居だぁ？
操子　や私ほんと、今年からなんで、
多紀　えーこご長男坊なんて、あ、賢ちゃん！？

賢太郎　あ、
多紀　賢ちゃん！
賢太郎　(笑)はい。
多紀　賢ちゃんだよーびっくりしたー！
賢太郎　(笑)
多紀　あ賢ちゃん、賢太郎っつうの？
賢太郎　そうですよ。
多紀　あ、そーだったんだーそんな、本名言わっちぇもわがんないよねえ？更年期なんだがら。
操子　あ、
賢太郎　(苦笑)
多紀　わー、賢ちゃーん。
賢太郎　はい。
多紀　まー、大人に・・・、きったない格好してー。
賢太郎　みんなは？
多紀　覚えでっかなー、覚えでないがなー、妙法(みよほう)の、多紀。多紀。
賢太郎　あーの、
多紀　妙法の、多紀。
賢太郎　すいません。
多紀　緑のお姉さん。農協の。今おばさんだげど。昔のお姉さん。
賢太郎　んあー・・・、
多紀　ほら賢ちゃんが、調子ん乗ってさ、やったべした、血まみれの、覚えてない？
賢太郎　えー、
多紀　なんかソリがなんが乗ってで坂道で、んでトラックに撥ねらっちぇ、血まみれんなって、おしっこ漏らして、よぐ生ぎでだごどーって、トラックさ撥ねらっちゃのに。
賢太郎　覚えてないっすねー。
多紀　ほんとこのぐれえ(身長が低い仕草)の頃よー、
賢太郎　いつ頃ですか？
多紀　あれーは小学校上がる前だったんでないがな。
賢太郎　あ覚えてないすね(笑)
多紀　あんどぎ、トラック運転してだの、私。
賢太郎　あ、
多紀　私私。
操子　あぁー・・・。
多紀　覚えでねえがー。その後病院さ連れでったのも私なんだげっちょもなー。(操子に) あ、賢太郎さん。こちらの、徳一酒造のご長男坊。
操子　あ、はい、今聞いてたんで大体。
賢太郎　どうも。
操子　あ、どうも。
多紀　こちらね、今、酒米卸してくっちぇる乾さん。
賢太郎　ああ。
操子　あ、乾です、お世話になってます。
賢太郎　どうも。
多紀　Iターン。Iターン。Iターンって、ターンしてないじゃないのよね(笑)
操子　(苦笑)

希穂、治、酒蔵の方から戻って来る。

希穂　！？
賢太郎　お。
多紀　希穂ちゃーん！！

希穂、賢太郎を見るなり、表情が一変する。
治、なぜか状況を察する。

多紀　賢ちゃん、帰ってこらったど！！
賢太郎　、おっすおっす。
希穂　・・・。
多紀　あれ？

間。

多紀　なんか感動の再会みだいの期待してだんだげど違うなこれ・・・。
希穂　・・・何？
賢太郎　や、うんー。
希穂　・・・。
賢太郎　なんか困ってること
希穂　ない。
多紀　(小声で)今景気良いのよ日本酒業界。
賢太郎　・・・。
多紀　(小声で)外人が喜んで買ってぐの。
賢太郎　・・・。

希穂、賢太郎を避けるかのように家に入っていく。

希穂　（去り際に）帰って。
賢太郎　え？いや、ここ、俺んちなんだけど
希穂　違うよ。
賢太郎　は？
希穂　ここは、徳一酒造の酒蔵です。
賢太郎　・・・。
希穂　私の家です。

一同、驚いている。

暗転。

●2．居所　麹造り

十二月上旬。夕方。
誰も居ない。

希穂の婿、玄戸寛(くろとひろし)、役場から帰宅する。

賢太郎　お帰り。

賢太郎が、物陰から出てくる。
寛、会釈して家に入っていこうとするが、
賢太郎、何となく行く手を阻む。
寛、仕方なく立ち止まる。

寛　・・・。
賢太郎　冷たくしないでよ。
寛　、別に、
賢太郎　家族じゃない。
寛　お宅のごど兄貴って思ったごどないすけどね。
賢太郎　・・ま俺も、寛弟だとは思ったことないけど。

間。

賢太郎　今も走ってんの？
寛　あ？
賢太郎　駅伝。
寛　、ああ。
賢太郎　マジか。
寛　・・・。
賢太郎　すげえなあ。
寛　・・・。
賢太郎　もうアレでしょ？指導する側でしょ。
寛　なんすか。
賢太郎　え？
寛　何聞ぎっちぃんですかって。待ぢ伏せみでえな真似して。
賢太郎　待ち伏せって(笑)
寛　、先輩・・・。
賢太郎　、何。
寛　、首突っ込むな、だど。
賢太郎　え？
寛　希穂。
賢太郎　、ああ。
寛　今更帰って来て兄貴ヅラすんなってごどでしょうよ。
賢太郎　ん、まあ(苦笑)　そりゃそうだあね。

間。

寛　病院さ行ったの？
賢太郎　え？
寛　お義母さんどご。
賢太郎　あ、行ってきた。
寛　あ、
賢太郎　昨日。思ったより元気そうで安心した。
寛　覚えでました？
賢太郎　え？
寛　先輩のごど。
賢太郎　うん。
寛　・・・あーそう。
賢太郎　まちっとおぼろげっちゃおぼろげだったけど。
寛　、あそうだ、
賢太郎　？
寛　車、どがしといでもらわんにっすか。
賢太郎　え？
寛　あんな突っ込みがだしてだらお義父さん戻っても入れらんねえんで。
賢太郎　えっと、
寛　？　あれ賢太郎さん、先輩のでねえの？
賢太郎　え？
寛　軽トラ。
賢太郎　あ違う。
寛　あそう。
賢太郎　うん。

と、寛、立ち上がり、鍵棚に鍵を取りに行く。

寛　んじゃ、希穂の。（鍵を一つ取り）
賢太郎　え、あー
寛　これ、ミニのキー。（鍵を手渡し）よろしぐお願いしゃす。
賢太郎　あー・・・。

尾辻、酒蔵の方から、作業着を脱ぎながら入って来る。くたびれた様子。

尾辻　あ、お晩です。
寛　あら。
賢太郎　あ終わり？
尾辻　はい、僕だけ。
賢太郎　え、
寛　早上がりでぎんだ。
尾辻　あ、はい。

寛　麹造り真っ最中でねえの？
尾辻　、忠さんが、おめもう良い、って。
寛　あ？
尾辻　手伝いの人が来てんですけど、その人だぢのが筋が良い、どが言われっちまいまして。
寛　誰。
尾辻　乾さん、だぢ。妙に良いんすよ、手付きが。やったごどねえくせに。
寛　あ乾さんどごのがあれ。
尾辻　え？
寛　軽トラ。
尾辻　あ、ああ。
寛　ほがの人のごど考えねえんだな、東京の人は。
尾辻　（苦笑）
寛　わがさえ良げれば構わねんだー。
尾辻　・・・。
寛　ったぐ。
賢太郎　ね尾辻君、
尾辻　ん、はい？
寛　んあ？
賢太郎　今、どんな状況？
尾辻　？　何すか藪から棒に。
賢太郎　いや、うん。
尾辻　状況って何すか。
賢太郎　や、その、全体的に？
尾辻　全体的に？
賢太郎　うん。
尾辻　全体的に・・・、良ぐはないですね。
賢太郎　？　何が？
尾辻　えぇ？　全体的に。
賢太郎　酒は？
尾辻　酒？
賢太郎　うん。仕込み。
尾辻　あー、仕込みは順調なんじゃないすか？俺帰して貰えでんすから。
賢太郎　あー、あそうか、あそっか。
尾辻　、はい。
賢太郎　いつも通り。
尾辻　ませっかぐ乾さんだぢつぐった酒米、良過ぎで、吟小町、精米忠さん大変そうでしたげど、まあ、そんでも、純米酒にするっつーごどで、いづも通りってわげにはいがなくなってんですけど。
賢太郎　あそうなんだ。
尾辻　までも大吟醸用の米は多紀さんがどっかがら仕入れで来てくっちゃみだいで、
賢太郎　あ多紀さん。
尾辻　はい、妙法の。
賢太郎　あー。
寛　尾辻くん、

尾辻　？　はい？
寛　部外者さあんまりベラベラ喋るもんでねーべ。
尾辻　あ、
賢太郎　部外者って何よ。家族でしょ？
寛　・・・。
賢太郎　親戚！　・・・二親等！
寛　、先輩。
尾辻　、え？
賢太郎　そうだよ同じ釜の飯食ってたじゃない。
寛　・・・。
賢太郎　え、・・・嫌いなの？俺(のこと)。
寛　・・・・・。
賢太郎　そこ黙られると肯定されたって思っちゃうんだけど。
寛　・・・。

寛、家の方に去る。

賢太郎　・・・。可愛がってたのになー。
尾辻　、え？先輩？
賢太郎　、一緒だったのよ、高校。
尾辻　へー。
賢太郎　駅伝部。
尾辻　・・・。
賢太郎　見えない？
尾辻　複雑っすね。
賢太郎　あ、ね。
尾辻　これ想像なんすけど、
賢太郎　、ん？
尾辻　今、賢太郎さん、あーんまり良ぐないと思います。
賢太郎　あ、
尾辻　全体的に。
賢太郎　うん。
尾辻　状況？
賢太郎　あ、うん、それは大体察してる。
尾辻　ええそうなんすか？
賢太郎　うん、俺の部屋完全物置んされてたし。
尾辻　あー、
賢太郎　倉庫で寝かされてるって時点で、
尾辻　えー
賢太郎　うん、ごめん。
尾辻　なんすかー、じゃわざわざ聞がなぐっても、
賢太郎　いや違うんだ、その、酒蔵？
尾辻　え？
賢太郎　酒蔵、酒造りは、どうなんだ、って、

尾辻　だがら順調なんじゃないすか？知らないっすけど。
賢太郎　ほんとに？
尾辻　ほんとも何も、俺何も教えで貰えないんだがらわがんないっすよ。
賢太郎　え？

尾辻、辺りを見回し、

尾辻　これ賢太郎さんだがら言うんすけど、内緒っすよ？
賢太郎　お、うんうん。
尾辻　俺、毎冬住み込みで、こご通うようんなって三年目ですけど、何にも教えで貰ってないっすからね？
賢太郎　あ、ああー。
尾辻　挙句、ポッと出のＩターン農家にその座を奪われようとしている今ですよ。
賢太郎　あ乾さん。
尾辻　どうしたら良いんすかね？
賢太郎　んー・・・。
尾辻　まどうしようもないんすけどね。
賢太郎　あ、
尾辻　盗め、っつわっちぇんだがら、遠慮なぐ盗ましていただぎます、と。
賢太郎　、ん？
尾辻　あ、技術をね？　技術を。
賢太郎　ああ、ああ。
尾辻　蔵人として。
賢太郎　はいはい。
尾辻　ええ。

事務所の入口から、榊奈緒美(さかきなおみ)が訪れる。

賢太郎　ん？
奈緒美　本当だ・・・。
賢太郎　え？
奈緒美　帰ってきてだ・・・。
賢太郎　あー。
奈緒美　カントク♪
賢太郎　、やめてよ。
奈緒美　だいぶ・・・、
賢太郎　、何。
奈緒美　、変わったね、印象。
賢太郎　そりゃ変わるでしょうよ。
奈緒美　、苦労したんだね。
賢太郎　？　うるせーよ。
奈緒美　・・・え、覚えでる？
賢太郎　や、覚えてるも何も。
奈緒美　、元気？

賢太郎　あー、まあ、まあ。
尾辻　ん？
賢太郎　、同級生。
尾辻　あ、
賢太郎　小中の。
尾辻　あ、
奈緒美　幼稚園も。
尾辻　へー。
賢太郎　奈緒美。
尾辻　奈緒美さん。
奈緒美　あ、こんばんはー。
尾辻　あ、どうも、こんばんはー。あ、尾辻です。
奈緒美　こんばんはー。
賢太郎　何わざわざ来たの？
奈緒美　フッ。来るでしょ。
賢太郎　来るか？
奈緒美　、多紀さんに聞いで。
賢太郎　え？
奈緒美　みんな知ってんでない？町の人。
賢太郎　すげーなあの人一瞬だな。
奈緒美　この町が一瞬なのよ。

尾辻、二人の空気を壊さないように少し遠ざかり、着替え始める。

賢太郎　え、今ーこっちなんだ。
奈緒美　今こっちって言うか、ずっとこっちだよ。
賢太郎　あそっか。そっか。（奈緒美の薬指を見て、指輪は無かったが）結婚した。
奈緒美　、した。
賢太郎　、誰と。
奈緒美　知らない人。
賢太郎　あー。
奈緒美　同僚。
賢太郎　え？
奈緒美　学校の。
賢太郎　え先生やってんの？
奈緒美　やってるやってるー！
賢太郎　どこの？
奈緒美　若商。
賢太郎　若松商業？
奈緒美　そうそう。
尾辻　え、（と、半端な姿勢で着替えが止まる）
賢太郎　若商かー、また微妙な高校の、
奈緒美　そうなんだよねー（笑）
尾辻　あー。

賢太郎　？　ん？
尾辻　微妙っすよね、若商。
奈緒美　え、若商？
尾辻　、はい。
賢太郎　え、ごめん微妙とか言って。
尾辻　いえ・・・。
賢太郎　（笑）　え何教えてんの。
奈緒美　、地学。
賢太郎　地学！？
奈緒美　地学。
賢太郎　商業高校で、地学？
奈緒美　そうだようるさいなーどうせ非常勤だっつの。
賢太郎　え、あ、そうなんだ・・・。え、じゃあ、
奈緒美　何？
賢太郎　大変だね・・・。
奈緒美　・・・。週休四日。
賢太郎　、大変だね・・・。
奈緒美　・・・、カントクは？
賢太郎　だからそれやめてよ監督じゃねーし。
奈緒美　だって、監督したんでしょ？
賢太郎　自主ね。
奈緒美　自主映画だって監督は監督でしょうよ。
賢太郎　だか、
奈緒美　監督、撮影、編集、録音、主演、助演、宣伝全部やってだんでしょ？
賢太郎　や、
尾辻　助演？（と、半端な姿勢で着替えが止まる）
奈緒美　凄いよねー。
尾辻　助演？
賢太郎　助演はやってない。
奈緒美　えーでも、
賢太郎　助演はやってない、マジで。主演で助演はできない。
尾辻　映画やってだんですか・・・。
賢太郎　ちょっとね。
奈緒美　えーでもでも、
賢太郎　ちょっマジやめて、
奈緒美　え、そんで何？　何で帰って来たの？
賢太郎　ん、ま、
奈緒美　え、なに嘘、映画撮る系？　酒蔵の映画撮る感じ系？
賢太郎　や、そういうんじゃない。
奈緒美　じゃ何、どしたの？
賢太郎　・・・、やめたんだよ。・・・全部捨ててきたの、ぜーんぶ。・・・察してんでしょ？
奈緒美　・・・うん。
賢太郎　・・・。

尾辻、賢太郎を見たまま固まっていた。

賢太郎　（誤魔化すように）そうだ、車？
奈緒美　、え？何で？　車だげど。
賢太郎　車回しといてっつわれたんだけどさ、やってくんない？
奈緒美　え？
賢太郎　外のミニ。（と、キーを出す）
奈緒美　え自分で、
賢太郎　免許無いんだよ。
奈緒美　え嘘、無いの？
賢太郎　うん。
奈緒美　、免許まで捨てたの？
賢太郎　捨てない捨てない(笑)。取ってないの。
奈緒美　は？
賢太郎　や、必要なかったから・・・。
奈緒美　東京の人だねー・・・。

尾辻、風呂に入る支度が整った。

尾辻　（思い出したように）あ、賢太郎さん。
賢太郎　ん？
尾辻　あの忠さんが言ってだんすけど、
賢太郎　何？
尾辻　うぢの風呂さ、入んねえで貰いっちぃって。
賢太郎　え？　は？
尾辻　、や、知ってっと思ってだんですけどー、酒蔵の息子なら。
賢太郎　何が？
尾辻　造り用の水で入れでるんで、造りやってる人以外は、入んないで欲しいらしぐって。
賢太郎　は？
尾辻　そんで、寛さんも、風呂屋行って貰ってんで。あの人も役場だがら。
賢太郎　（思い出した）あー。
奈緒美　へー。
賢太郎　えでも、昨日まで普通に入ってたけど。
尾辻　勝手にね。
賢太郎　え、だって、
尾辻　忠さん的には、有り得ねえ、マジ有り得ねえってブチ切れてて、
賢太郎　え忠さんが？
尾辻　はい、
賢太郎　そんな言い方？
尾辻　はい、半端ねえ有り得ねえ、って。先代が宥めてましたけど。
賢太郎　親父？
尾辻　はい。
賢太郎　えーでも、まだそんなんこだわってんだ？？
尾辻　やまあ、そごは、迷信っつーか、ただの慣習なんでしょうけど、

賢太郎　酒の味と関係ないじゃん
尾辻　・・・・、そういうもんらしいんで。

寛、タライとタオル、シャンプーや石鹸を持って出てくる。

間。

寛　車、動かしてくっちゃの？
賢太郎　あ・・・・、
寛　・・・・。風呂行ってきます。

と、寛、出て行ってしまう。

賢太郎　・・・・。
尾辻　すいません。じゃお風呂いただきます。

と、尾辻、家の方に入っていく。

賢太郎　・・・・。
奈緒美　・・・・ウチ来る？
賢太郎　？
奈緒美　お風呂ぐらい貸すよ。こっそり。娘中学生だから変な気起こさなければ(笑)
賢太郎　・・・・。
奈緒美　ん？
賢太郎　何も変わってねえじゃん。
奈緒美　え？
賢太郎　うちの酒蔵じゃねえじゃん、全然。
奈緒美　何なに？
賢太郎　忠さんの酒蔵じゃん、いまだに。
奈緒美　・・・・。
賢太郎　やっぱりだよ。
奈緒美　何？
賢太郎　・・・・見てろ。
奈緒美　・・・・？

暗転。

●3．献言　酒母(しゅぼ)

十二月中旬。昼過ぎ。
仕込みは順調らしい。

希穂、一朗、作業着姿で事務所に居る。
田知本譲(たちもとゆずり)、机を挟んで、希穂と一朗の前に立っている。首にスカーフを巻いているなど、少々場違いな服装である。

田知本　・・・間に合いませんか？
希穂　ですから、
田知本　ええ、
希穂　今更言わっちぇもですね、
一朗　今更だな。
希穂　うん。よりにもよって、立春朝搾りって(笑)
一朗　よりによってな。
田知本　ええ、朝搾りを皮切りに、特定名称酒も、普通酒も、
希穂　・・・ご協力したいのは山々なんですけど・・、
一朗　んー。
田知本　そこをどうか。
希穂　もう、卸先決まっちゃてんですよ、
田知本　、ええ。
希穂　今年のは。
田知本　ええ。
一朗　七月。
希穂　はい七月には。
田知本　えぇえぇ。
希穂　今年の製造計画決める時点で、大体は。
一朗　大体な。
田知本　大体が。
希穂　はい。
田知本　はい。七月の時点で、大体、なるほどですねー。
希穂　ですから、もう今がらっていうのは、
田知本　半年も遅い、と。
希穂　ま半年って言うが、あ半年か、五カ月ぐらいですけど、
一朗　五カ月だな。
田知本　五カ月ですね。
希穂　今がら仕込みの量変えるわげにはいがないですし。
田知本　ええ。理解しております。
希穂　っていうが増やせないんです、
田知本　ええ。
希穂　そもそも。
一朗　そもそもな。
田知本　存じております。

希穂　減らすならまだしも。
田知本　重々承知しております。
一朗　米も。
希穂　お米だって無いですし。
田知本　はい。
希穂　ええ。
田知本　なるほどですねー。
希穂　ご覧の通り、小さい酒蔵ですから、すいません、ほんとそういうのは、末廣(すえひろ)さんとが花春(はなはる)さんとが、そういう、大きな酒蔵さんに行かれだ方が、
一朗　栄川(えいせん)とがな。
希穂　栄川とが。
田知本　そこを、どうか。どうにか。
希穂　お気持ちはありがたいんですけど、
田知本　どうにか！
希穂　どうにもなんねぇんですって。
一朗　どうにもなんねえな。
田知本　じゅうぶん理解しております。
希穂　・・、理解して貰えてる感じがしないんですけど・・・。
田知本　無理は承知で、お願いしております。
希穂　・・・。

沈黙。

一朗、田知本の名刺をつぶさに見ながら、

一朗　これ、
田知本　はい。
一朗　「ナゴミ」っつうのは、
田知本　はい。
一朗　お店の名前なんですか？
田知本　そうですね。
一朗　「ナゴミ」と「ザ・ナゴミ」は、何が違うんですか？
田知本　大体一緒です。
一朗　・・・、その、それは、
田知本　強いて挙げるなら、名前が違いますね。
一朗　、あ、へぇー。名前。あ、ザが付く。
田知本　冗談です。
一朗　、あ、冗談でしたか。
田知本　基本の、グランドメニューはほとんど同じなんですけど、コンセプト、内装ですとか、
希穂　(奥の方へ)隠っちぇないで出て来っせ！
一朗　？
希穂　聞いでんでしょそこでー。

賢太郎、物陰、あるいは戸の裏に隠れて聞いていたらしく、いそいそと現れる。

賢太郎　・・・。
田知本　・・・。
希穂　お兄ちゃん呼んだ人なんだがらお兄ちゃんなんとがしてよ。
賢太郎　なんで駄目なの。
希穂　なんでもなにも無いでしょうよー、駄目なものは駄目、無理なものは無理なんだがらー。
賢太郎　でも、「ナゴミ」だよ？
希穂　それが何よ。
賢太郎　超大手だよ？　全国そこら中にあるんだよ？　日本全国でうちの酒が呑まれるって、凄いことじゃない？
希穂　それは凄いごどがもしんないげど、
賢太郎　だか、
希穂　そういうごどじゃないでしょって、今の話聞いででわがんない？　そんなに造れないんだって、この蔵じゃ。
賢太郎　だから、今年は、まずお試しだろって。
希穂　何お試しって。
賢太郎　限定で、ナゴミ系列で試しに出して貰って、来年に繋げれば、
希穂　だがら来年にって、そんないっぱい注文貰ってもつぐらんにだって。
賢太郎　え、だからー、売れないよりは売れた方が良いわけじゃん、蔵元としては。
希穂　や、ま、それはそうなんだげれども、
賢太郎　ほらー！
希穂　そうなんだげっちょも、付き合いってものもあるわげで、卸業者さんも、直接契約さんも、そういう昔っからのお得意ほっぽってナゴミさんさ全部卸すなんて、常識的に言って、
賢太郎　それは酒の世界の常識だろ？
希穂　人としてでしょうが！

間。

賢太郎　あのさー。日本酒は、商品なんだよ。
希穂　何よ。
賢太郎　つまり、マーケティングなんだよ、大事なのは。
希穂　何が言いっちの。
賢太郎　味が、っていうか、味は勿論大事だけど、でも売りたいなら、売り方なの。
希穂　何。
賢太郎　映画だって、俳優だって女優だってそうだよ。
希穂　は？
賢太郎　クソつまんねえ映画でも、テレビでパブ打って試写会で良い感想拾ってＣＭ流して、
希穂　パブって何よ。
賢太郎　他のジャンルともコラボして、(パブは)宣伝。メディアミックスしてっていう、だからもう、中身じゃないの。流行る映画って。結局、ただの売り方の問題なの。俳優もそう。女優もそう。
田知本　それはちょっと偏り過ぎじゃない？
賢太郎　(田知本に)ちょっと待って。(希穂に)そのね？　売り方の問題。事務所側の売り方の問題

希穂　なの。顔でも技術でも性格でもなくて。
賢太郎　そんで自分の売り方に失敗したがら帰って来たって？
希穂　だ、それは、
賢太郎　そうじゃない。
希穂　・・・。
賢太郎　何か・・・、不味くても売れるって言わっちゃみだい。
希穂　いや、そういうことを言いたいんじゃねーんだよなー。・・・何だろなー。
賢太郎　本当に美味しいお酒造りたいっていう人が馬鹿みだい。
希穂　本当に美味しい酒なら、もっと色んな人に受け入れてもらうべきだろう？
賢太郎　・・・。
希穂　だから、そうだ、海外展開は？ナゴミのネットワーク使って海外の、
賢太郎　やってますけど既に。
希穂　え・・・、
賢太郎　英語対応して直販。日本よりずいぶん高く買って貰えてますけど。
希穂　英語・・・。
賢太郎　What you want The Sake made in Tokuitsu Brewery?

間。

一朗　これ、「ナゴミんけ」ってのは？
田知本　「ナゴミん家(ち)」ですかね。
一朗　あ、「ち」。
田知本　はい。
一朗　へぇー・・・。友達んちみだいですね。
賢太郎　親父！
一朗　・・・。
賢太郎　（希穂に）乗らないと損なんだよこの話。だって、この酒蔵もっともっと大きくしたいじゃん！　「徳一」って酒を全世界に轟かせたいじゃん！
一朗　・・・。
田知本　要は、徳一酒造様が、今後全国区にその名を轟かす、足掛かりになりたいんです。
賢太郎　、って、こと！
一朗　・・・轟ぐ量は造れねえべ。うぢのタンクいぐづだど思ってんの。
賢太郎　・・・でも、じゃあ搾り終わったタンクにもう一回造れば
希穂　そういう簡単なもんじゃねえんだってば。そんな、酒は、一日二日でできるもんじゃねえって、そんぐらいは知ってんでしょ？　米蒸して麹作って、二週間寝かせて酒母(もと)造って、三日かけて醪(もろみ)仕込んで、そっからひと月発酵させてようやく仕上がる。それを毎日のようにやってんの。毎冬。一個新しく造ろうっつったって、人手も足りないし、そんな、東京中にばら撒ぐほど量作れねえの。
賢太郎　だったら新しいタンクと機械入れて、
希穂　んな設備投資する金どごにあんの？お兄ちゃん出してくれんの？
賢太郎　、それは・・・。
一朗　・・・大体、忠さんが首を縦に振らねーべ。
賢太郎　・・・。

間。

賢太郎　俺は、ただ、手伝えることがあればって、
希穂　お兄ちゃんに何が出来んの？
賢太郎　・・・。
希穂　酒造りのさの字も知らねえで、ちっちぇえ頃だってそうだった。私ばっか手伝って、お兄ちゃん友達とゲームばっかやってで。
賢太郎　・・・。
希穂　お酒って、何から出来でっか知ってんの？
賢太郎　米だろ？
希穂　土と、水だよ！
賢太郎　、えー・・・。
希穂　あと、人！
賢太郎　・・・。
希穂　人！
賢太郎　・・・。
希穂　良い土で良い米作ってくれる人が居で、美味しいお水があって、美味しい酒造りたいっていう人が居るから、美味しいお酒が出来上がるの。なーんも知らねえくせして、いぎなし何よ・・・。
賢太郎　・・・。
希穂　酒蔵手伝いたいって言うなら、ちっとは勉強してがら帰ってきたら？　うぢの酒ろぐに飲んだごどもねえくせに。
賢太郎　それはしょうがねえべな！　飲めねえんだがら！！

間。

賢太郎　飲みっちぐっても、飲めねえんだがら・・・、身体が・・・。

沈黙。

田知本　地域貢献、したいと、私は相談いただきまして。
希穂　は？
田知本　実家が、風評被害で困ってるはずだって、そう、仰るもので、
賢太郎　うん。
希穂　え、今更何言ってんの？
賢太郎　え、
一朗　（苦笑）
希穂　今更・・・。五年も遅えんだっつの！！
賢太郎　あぁ・・・。
希穂　放射線検査だ何だって水がら米がら一番大変な時音信不通で、ようやぐ落ち着いで前向ごうっつう時に、狙いすましたように帰って来てがらに。
賢太郎　狙いすましてなんかねえよ。
希穂　なんかそれ、「なんか自分に出来ることないですかー？」つって大挙して海辺さ押し寄せたノータリンのボランティアと一緒じゃね？　テレビで見だ被災地にばっか集まって。

何が必要なのがも考えないで。自分だけの正義感で駆け付けで。逆に迷惑なんだよこちとら。

賢太郎　・・・・。

田知本　ごめん、全然フォローになんなかった。

賢太郎　・・・・。

希穂　どうせデモだ何だ通ってだんでしょ？

賢太郎　あ？

希穂　バガみでぇ。デモ行ぐ暇さあったら米作れよ。田んぼ耕せよ、若人よ。

賢太郎　・・・・。

間。

希穂　（田知本に）さ、もう、平行線ですから、これで、

賢太郎　ずっと忠さんの言いなりで良いのかよ！

希穂　言いなりんなんかなってないでしょうよ！

賢太郎　なってるよ！

治と操子、酒蔵の方から入ってきそうになるが、室内の様子に驚き足を止める。

賢太郎　そりゃ売り方は希穂が色々やってんだろうけど、仕込みは完全任せっきりなんだろ？

希穂　そうでしょうよだって親方なんだがら！

賢太郎　継いだんじゃないの？蔵元杜氏。

希穂　・・・・。でも、成分分析とかも、

賢太郎　三役も船頭も全部忠さんやってんだって？

希穂　、そうだよ。だって、

賢太郎　それさ。忠さん居なくなったらどうすんだよ。

希穂　・・・・。

賢太郎　そりゃ良い杜氏さんなんだろうさ、技術がどんだけあんのかは知らないけどさ、祖父ちゃんの頃から、きっちり味守ってくれてんだろうよ。

一朗　賢太郎。

賢太郎　でもさ。ずっと忠さんの世話になるってわけにもいかんでしょう？

一朗　賢太郎！

賢太郎　ここは、誰の酒蔵なんだよ！？

一朗・希穂　・・・・。

間。

操子　今じゃないね。

治　うん。

操子　戻ろう。

治　うん。

治、操子、酒蔵の方へ去る。

一同、治と操子が去った方を何となく見る。

希穂　そもそもの話ですね？
田知本　、はい。
希穂　税務署に申告してる以上の量は造れないんです。犯罪なので。
田知本　存じております。
賢太郎　え？
田知本　うん。
希穂　それに今、この酒蔵が食っていぐだげのお金は稼げてますんで、別にこれ以上儲がんなぐって良いんです。
田知本　、えぇ。
希穂　そもそも、うぢの酒昨日今日飲んだくらいで、よぐのうのうと、専属契約とか言えますよね。
田知本　・・・。
希穂　申し訳ありません、お引き取りください。
田知本　・・・。
希穂　お引き取り下さい。
田知本　・・・。
希穂　では私が引き取ります。

希穂、酒蔵の方へ去ろうとする。

一朗　・・・気持ぢは、ありがだぐ受げ取るげっちょも、

希穂、立ち止まる。

一朗　（賢太郎に）もし・・・、もしお前が本気で「徳一」のこど考えでくれるっつーんなら、余計なごど考えっこどねえがら、素直に忠さんの手伝いでもして、
希穂　え、
一朗　杜氏の修業積んでくろ。
希穂　お父さん！
賢太郎　・・・。
一朗　うん。

間。

田知本　私・・・、徳一のお酒、大好きだったんです。

希穂、一朗、驚く。
賢太郎も少し驚く。

田知本　純米大吟醸。もちろん本醸造も。
希穂　だった、って何ですか？
田知本　覚えてませんか？三年くらい前だと思うんですけど、一度、お電話差し上げたんです。
希穂　（一朗に）えぇ？

一朗　知らねえ。
田知本　その時にも、断られてるんです。今忙しいから掛け直します、って言われて。何回も。ちゃんと繁忙期避けて、夏場の、ＢＹ(酒造年度)が替わる直前くらいに電話してたんですけど。忙しいって、
希穂　はあ。
田知本　確か女性が、電話口に。
希穂　お母さんかな。
一朗　呆げ始めだ頃だ。
希穂　うん。
賢太郎　あ、
田知本　その時はまさか、玄戸くんのご実家だったなんて知らなかったんですけど。そもそも玄戸くんのことすら、こないだ急に電話貰って思い出したくらいで。
賢太郎　番号変わってなくて良かった。
田知本　久し振り過ぎてびっくりして。
希穂　なして、このクソ兄貴と知り合われたんですか？
賢太郎　クソ兄貴って、
田知本　まあ、
賢太郎　バイト。昔の。「ナゴミ」ね。
希穂　それで、なんで？
賢太郎　ネットで。本当に美味い酒を足で探す女部長、っつって特集組まれてて。出てて、田知本さん。文明の利器だよ。凄えよなネット。
希穂　それでのうのうと電話できるお兄ちゃんが凄いと思うよ。
賢太郎　・・・。
一朗　何で、うぢの酒飲んだごどあったんですか？

間。

田知本　・・・さいたまの、
一朗　え？
田知本　さいたまの、小さなお店で、いただきました。
希穂　さいたま？
田知本　・・・えぇ。
一朗　あ、浦和がぃ？
田知本　あ、
一朗　浦和の、
田知本　そうですそうです！
希穂　ああ、浦和の叔母ちゃんのお店。
田知本　そうだったんですね！！
一朗　まあ、ちっちぇえバーですけど、
田知本　ええ、すごく雰囲気のある、
希穂　バーじゃないよスナックだよ。
一朗　あスナック。
田知本　、スナックー。雰囲気のあるー。
希穂　よぐもまあそんな、小さなお店に。

田知本　足で探す女ですんで。
一朗　はー。
田知本　それで、はい、アタックしてたんですけど。結局まともに連絡取れないってことで、当時はまだ私も平だったので、そのままフェードアウトしてしまい。
一朗　それはそれは。
田知本　思い出の酒なんです、ある意味。さいたまのスナックの(笑)

少しの間。

一朗　・・・ありがどうございます。
希穂　ま、だがら何だって話ですけど。
田知本　・・・。
希穂　では。
田知本　何とかなりませんか？
希穂　、まず、兄経由っていうのが、一番の失敗でしたね。
賢太郎　・・・。
希穂　どうにもなんないんですよ、物理的に・・・。ごめんなさい。
田知本　・・・。杜氏さんに直接お話しさせていただけませんか？　卸していただけるかどうかは別にして、あれだけ美味しいお酒を造られた方と、今、話してるんですけど(笑)
希穂　え？
田知本　六代目です。蔵元杜氏。
希穂　あ、
田知本　五代目です。
一朗　、や、その、忠さんっていう方は、
田知本　仕込み真っ最中ですよ。
希穂　・・・上がってこられるまで待ちます。
田知本　そういう問題じゃないと思うんだげどな・・・。
希穂　待ちます。
田知本　無駄ですよ。
希穂　待ちます。
田知本

田知本、どっかりと座り、動こうとしない。

間。

賢太郎　俺呼んでこようか？
希穂　お兄ちゃん行ったら余計こじれっからやめで。私行ってくっから。

と、希穂、酒蔵に向かう。

沈黙。

一朗　(賢太郎に)・・・紹介したい人がいるっつうがら、

賢太郎　ん？
一朗　嫁でも連れでくんのがど思ってだー。
賢太郎　・・・・。
田知本　・・・・。
一朗　・・・そういう腹積もりは、
田知本　ごめんなさい一切。
一朗　、あそうですか。
田知本　ごめんなさい。
一朗　・・・・。
賢太郎　・・・・。

間。気まずい三人。

一朗　俺も行ってくっかな。

と、一朗、出て行く。
田知本、ものすごくほっとする。

賢太郎　凄いね。
田知本　え？
賢太郎　さすがだわ。
田知本　何が？
賢太郎　え・・・、熱意？
田知本　、ああ。ハハ(笑)
賢太郎　今いくら稼いでんの？
田知本　それ知ってどうすんの？
賢太郎　や、何となく。参考までに。
田知本　九百。
賢太郎　？　時給？
田知本　年収。
賢太郎　あ、ああ。へー、え！？　九百！？
田知本　貰い過ぎだと思う。
賢太郎　え、ボーナスもあって。
田知本　、まあ。色々大変だけど昨今。
賢太郎　えー、へー、はー、さすがだなー…。一緒に時給七百円で働いてた人とは思えないわ。
田知本　あれ最低時給下回ってたよね？？
賢太郎　うん、たぶん(笑)
田知本　ねえ？(笑)
賢太郎　えー、でも、凄いね、
田知本　え？
賢太郎　変わったね。
田知本　何が？
賢太郎　ん？　や、何だろ、やってる仕事？の質？っていうか、金額？だって年収九百でしょ？
田知本　や、何も変わってないよ？

賢太郎　え？
田知本　うん。だってあの頃も、今も、うん、変わんない。
賢太郎　んなことないでしょー。
田知本　みんなに喜んでもらいたいだけだから。
賢太郎　え？
田知本　あの頃だって同じじゃん。お金稼ぐために働いてたわけじゃないし。
賢太郎　ん？
田知本　みんなに美味しいお酒飲んでもらって、楽しい時間過ごしてもらいたいって思ってただけだから。てか、お酒好きだっただけだし。根っこは何も変わってないと思うんだけど。
賢太郎　・・・。
田知本　え、玄戸くんは違うの？
賢太郎　、あー。
田知本　映画だって、そうだったんじゃないの？
賢太郎　ん、
田知本　みんなに楽しんでもらいたかったんでしょ？
賢太郎　あ、・・うん。
田知本　ねえ？　それが、思ったより少ない人にしか楽しんでもらえなかったという結果は残念ではあるけれども。
賢太郎　・・・ね。
田知本　え、何でだと思う？
賢太郎　ん？
田知本　何で、玄戸くんの映画はウケなかったんだろう。
賢太郎　あー。
田知本　って、考えたことある？
賢太郎　・・・。

間。

賢太郎　え、でもなんか、飲んだことあったんだね。
田知本　、え？
賢太郎　徳一。
田知本　、ああ。(笑)
賢太郎　昨日、初めて飲んだって、
田知本　初めて。昨日初めて飲んだ。
賢太郎　、ん？
田知本　当たって良かったー！
賢太郎　は？
田知本　こういう博打に勝った時が気持ち良いよね。
賢太郎　・・・え、嘘！？
田知本　うん。
賢太郎　さいたま？
田知本　うん。
賢太郎　浦和？
田知本　うん。嘘。

賢太郎　えー！！
田知本　やー、持ってるわ、私。
賢太郎　、うん・・・。
田知本　こっちだって必死なの、珍しい酒探すのに。
賢太郎　いや、そりゃそうだろうけど、うわー・・・、女怖ぇなーマジで。
田知本　女じゃなくてバイヤーね。

牛島忠道(うしじまただみち)、現れる。
一朗、希穂も追い掛けてくる。

田知本　あ、

と、田知本、忠道が入ってきたことに気付き、嬉しそうに立ち上がり、居ずまいを正し、名刺を準備し、挨拶しようと忠道の元へ向かっていく。

田知本　初めまして、
忠道　どうも。
田知本　私、ナゴミフードシステムズ営業企画本部長の、田知本譲と申します。

と、田知本、名刺を差し出す。
忠道、田知本に粉を振り掛ける。塩を撒くように。
田知本、驚く。

希穂　忠さん！！

田知本、驚きのあまり動けなかったが、粉を振り払おうとし、せき込む。

田知本　何で、しょうか・・・？
忠道　もやしだよ。
田知本　え？
忠道　麹菌。
田知本　嘘、
忠道　カビだ、カビカビ(笑)

忠道、笑っている。

暗転。

●4．仇敵　造り　初添

十二月下旬。夜。
醪の仕込みが始まっている。
寛、酒蔵の方に話かけている。その奥には、希穂がおり、日本酒の成分分析をしているようだ。

寛　悪い話ではねえんでないの？
希穂(声)ええ？
寛　たーだ帰って来たっつうわげじゃながったってこどだべした。
希穂(声)ええ？
寛　先輩。
希穂(声)んまそうがもしんないげどー。
寛　別に今がらどうにがっつうんでなくて、来期再来期見越しての話として。
希穂(声)今期どうにがしたいっつってんのよあの人は。
寛　あー・・・。
希穂(声)立春朝搾りを出したいんだどー。
寛　「ナゴミ」で？
希穂(声)「ナゴミ」でー。
寛　んなの、そんな量搾れねえべした。
希穂(声)そうなのよー。
寛　そんでもー、
希穂(声)何。
寛　そんぐらいでげぇ蔵にするつもりあんなら、俺だって役場辞めでこっちゃ手伝うっつうのも・・・。

希穂、現れる。手には、日本酒の成分分析道具。

希穂　、本気？
寛　、おー。
希穂　・・・。

希穂、酒蔵の方へ。

希穂(声)私はさー、
寛　うん。
希穂(声)有象無象のたくさんの人に飲んでほしいんじゃなぐって、本当に酒の味を分がってる一部の人に、ずっとずっと飲み続げで欲しいのね。
寛　それは分がるよ。
希穂(声)売り上げを上げっちぃなんつう気持ぢは、無いの。ずっと言ってっぺした。
寛　そう言うげっちょもさ、一部の人だっつっても、ずっと生ぎでるわげじゃねえべ。その人が死んじまったら、次に飲んでくれる人を探さなぐっちゃなんねえべした。
希穂(声)・・・。

寛　その種撒ぎぐらいはしといでも悪ぐないんでないの？
希穂(声)んー・・・。駄目だ。

と、希穂、試験管を持って現れる。

寛　？　駄目？
希穂　ん？　うんー。
寛　何で。
希穂　火入れしてないがら。
寛　あん？
希穂　やっぱ難しいのがな熟成は。
寛　あ？
希穂　ん？　いや、老香(ひねか)が出っちまって。日本酒度は変わんないんだげどね。
寛　・・・。
希穂　どうすっと良いのがな。(と、試験管を寛に渡す)
寛　(試験管を受け取り)新商品？
希穂　ん？
寛　これ。分析。
希穂　あ、そうそう。
寛　ちゃんと考えでんべした。
希穂　ん？
寛　先のごど。
希穂　考えでるよ？
寛　だったらー。(試験管の日本酒を飲んで)旨ぐね。
希穂　・・・寛君は、どっちの味方なの？
寛　？　味方とがじゃねえべした。
希穂　こないだまであんなに、クソミソに言ってだくせして。
寛　いやクソミソだよ？あの人は。
希穂　、え？
寛　クソミソ野郎だよ。役場でも、真人間過ぎで仕事遅え野郎もいれば、仕事は無茶苦茶早いげど臨時の中卒女子喰いまぐってるクサレゲスもいるもん。でも、本人がクソミソでも、アイディアの価値とそごはまだ別物だべした。
希穂　クソミソって言われっと腹立つもんだね。
寛　・・・悪い。
希穂　ううん。
寛　や、何も、百パーセント賢太郎さんに賛成っつうごどじゃねえんだよ？　もっと話詰めだ方が良いど思ってるよ？　ただ、ゼロパーセントにしちまうのは、
希穂　まあ、クソ野郎だよ・・・。

多紀、入って来る。

多紀　お晩ですー。
寛　あ、
希穂　お晩ですー。

寛　お晩ですー。
多紀　あらー寛さん、達者～？
寛　あ、はいまあ、
多紀　まーだ逞しいごど。
寛　ハハ(苦笑)
多紀　運動？　運動してんの？
寛　や、
多紀　何の運動？体操？
寛　まあ最近はほどんど、
多紀　マラソン？あマラソンかマラソンだ。
寛　はあ
多紀　あ、賢ちゃんは？
希穂　え？　あ、どっか行ってんですかね。
寛　分がんないっすね。
多紀　あーそうー。
寛　昼も夜も曜日もないみだいなんで。
多紀　タフねー。
希穂　暇なだげでしょうよ。

間。

多紀　え、寛さん寛さん、何か言わっちない？
寛　はい？
多紀　役場で。
寛　え？
多紀　何か言わっちない？
寛　なんかって何すか。
多紀　えぇ？いや、賢ちゃん。
寛　、いやあ？
多紀　あそうー。気ぃ遣ってくっちぇんだべなあ。
寛　え？
多紀　いや、ほら、一応兄様(あにさま)だべした、
寛　ん、はあ。
多紀　だがら。
寛　、何を？
多紀　あんま、賢ちゃんの陰口が、耳に入らないようにって。みんな優しいねー。「玄戸さんち」って話題んなっと大概アレだよ？賢ちゃんの噂。陰口。悪口。罵詈雑言。
寛　、あそうっすか。
多紀　都会でフラフラしてだのがにっちもさっちもいがなぐなって帰って来たーだの、就職すんでもなぐ昼日中がらブラブラして酒飲んでるーだの、もう黴菌扱いでよ、
希穂　そんなん言われでんだ。
多紀　黴菌が酒みんな腐らせっちまうぞー身上潰しちまうぞー(笑)って、あっごどないごど。
希穂　(笑)
多紀　もー聞ぎっちくねえきへい悪ぃ、っつっても駄目ね。人の口さ戸板は立だないよ。いぐ

ら気ぃ遣ったっつってもねえ。
寛　、んまその気遣いも今、台無しになりましたけどね。
多紀　え？
寛　いや、全部、言っちまうがら(笑)
多紀　いや、違あの、他の役場がら。
寛　え？
多紀　あら寛さん建設課だっけ。
寛　会計課です。
多紀　建設課だったらわがんないよね。
寛　や、会計・・・、
多紀　農政課さ来てっと思うよ？寛さんさ言ってないだげで。
寛　？　賢太郎の悪口？
多紀　違くて、米。
希穂　え？
多紀　米。分けでくろ、っつって。酒米。
希穂　え、何何で？
多紀　いや、うぢにも来たの。
希穂　農協？
多紀　そう。吟小町余ってねえ？って。何をいまさら、って思ったんだげっちょ、ほらみんな、酒米はみんな蔵に卸しちまうべした、放射線検査終わったら。
希穂　ああ。
多紀　そんで、よその町さ行げば備蓄米あるっちゃあんでねえの？ねえっちゃねえがもしんにぇげど、っつったら、飛んで出でってよ。したらさ、もう、色んな農協から電話来て。多紀さん勝手なこと言いっさんなー、備蓄米なんてねえよーしかも吟小町なんか、あるわげね、っつって。
希穂　米見っけできたってしょうがねえのに・・・。
多紀　何、追加で仕込むの？
希穂　仕込めないですって。
多紀　何しようどしてんの？賢ちゃんは。
希穂　さあ。何かしようどしてるみだいですけど、
多紀　んでしかもさ、あの、何か、女の人、トレンディな、っていうの？　アーバンな、都会かぶれな、
希穂　ナゴミの人？
多紀　キャリアウーメンみだいな人ど一緒らしぐって。何か首に巻いでる、スチュワーデスみだいな。
希穂　ああ。
多紀　どごの空港さ行ぐのー、会津にゃ空港なぞねえぞー、って、飛びます飛びます、ですか？って。
寛　何、多紀さんそれ言いにわざわざ来てくっちゃの？
多紀　あぁ？

間。

多紀　あれ何しに来たんだっけな・・・。・・・えーとね、

忠道、酒蔵の方から、作業着姿で入ってくる。

多紀　あら忠さんお晩ですー。
希穂　あ、
忠道　？　あぁ？
多紀　あら？
希穂　どう？
忠道　ああ？　ああ、酵母がまんだ育ってねえな。
希穂　もう少し？
忠道　ああ、もう少し踊らしといだ方が良いがもしんねえ。
希穂　私見どっかぃ？
忠道　いや、(俺が)見る。
多紀　忠さんお晩ですー。
忠道　？　（目を細めて多紀を見て）あー多紀さんか。
多紀　何忘れっちまったの？
忠道　どごの別嬪さんがど思っちまったー(笑)
多紀　なーにまだ(笑)
忠道　よっく見だら美人じゃねがった(笑)
多紀　ババアだったって？
忠道　何その髪型。
多紀　髪型、あ、パーマ落ぢっちまったのー。パーマも下手なんだ困っちまーポワソン。
希穂　んじゃ行がなっきゃ良いべした(笑)
多紀　ポワソンぐらいしかねえんだもんプレミアム商品券使えっとご仕方ねえべした。

忠道、酒蔵とは別な方へ向かう。

希穂　休憩？
忠道　便所。

と、忠道、トイレへ去る。

多紀　何、ボゲ始めだの？
希穂　ああ、
多紀　お母さんと一緒？
希穂　忠さんのは、目。
多紀　認知症でないがらまだ良がったげどねえ。
希穂　え？
多紀　あお母さん。（忠道は）目？
希穂　目。
多紀　何、見えねえの？
希穂　やあ・・・。
多紀　老眼？
寛　肝臓ですよ。

希穂　あ。
多紀　何、飲み過ぎ？
寛　はい(笑)
多紀　あんらー。
希穂　ちょっと、
寛　みんな知ってんもん良いべした。
多紀　飲みながら仕込んでんの。
希穂　や、仕込み中は飲まねぇよ？
多紀　へぇー、行ぐどごまで行っちまった感じだねえ。
希穂　飲んでないのよ？
多紀　毎晩二升飲むっつったべ？
寛　そごまでは(笑)
多紀　いぐらなんでも二升は、
寛　それは言い過ぎですけど、
多紀　ええ？
寛　積もり積もってんですよ。長年のが。節制っつう言葉知らねえがら(笑)
多紀　知らないがらねえ・・・。

間。

寛　忠さんも、焦ってっと思いますよ。
希穂　え？
多紀　何が？
寛　後進が、
多紀　あ？
寛　育だないがら。
多紀　ああ。尾辻君っつったっけ。
希穂　はい。
多紀　なに駄目なの？あの子。
寛　（苦笑して）だべ？
希穂　、や、・・・悪い子じゃないんだげどね・・・。
多紀　悪い子じゃないが、
希穂　仕事はできない。
寛　しかしプライドは高い。
多紀　最悪だべした。
寛　はい。
希穂　、頑張ってんですけどね。
多紀　そうなんだ。
希穂　、はい。・・・すぐ失敗すんですけど、平身低頭謝ってくっから、こっち何も言えなぐなっちまーんですよね。でもまだ同じ失敗すんですよ。
寛　反省すっけど成長しない。
多紀　一番タチ悪いべした。
希穂　まあそんでも、言ってんですけどねー。
多紀　あー、でも、言って、注意していじめでるみだいに思わっちぇもねえ？

希穂　そうなんです。
寛　どうしようもねえな。
希穂　うんー・・・。正直、私の方が出来るって思っちまうのも、それも良くないし。
多紀　・・・。
寛　出来が悪いくせに頑張られんのが一番迷惑なんすよね。
希穂　・・・。
寛　（多紀に）ねえ？
多紀　・・・、ん？　ごめん今馬刺しのごど考えでだ。
寛　何で？(笑)
多紀　何でだべ。
寛　は？
多紀　・・・・あ、息子さ馬刺し送っぺど思ってだがらだ。
寛　何だそれ(笑)
多紀　いや、うぢのもさ？　折角東京の大学さやったっつーのに、全然学校行ってねえんだど。
寛　あ、はあ、
多紀　バンドだがフォークソングだがわがんないげど何か、フォークソングだがバンドだがやってるみだいで。何だ、ライブだがバンドだが何かの大会で？　ノミネートしたんだが外っちゃんだが、フェスに出るんだが出ないんだが、まあ良ぐわがんね。
寛　全然分がんないっすね(笑)
多紀　寛さ、希穂ちゃんもね、子育て失敗したら駄目だよ？　今四十？
希穂　三十七です。
多紀　四十で今がら作ったら、子供就職する前に還暦超えるわげでしょ？　将来への不安ったらないよ？ほんとに。

一朗、外から入って来る。

多紀　盆正月も帰って来ねえでさあ・・・、
寛　心配ですねえ、
多紀　ったぐ。
希穂　あお帰り。
寛　お帰りなさい。
一朗　、うん。
多紀　何で忙しいんだが女の尻追っ掛げでんだが追っ掛げらっちぇんだが、あ、うぢのね？　将仁(まさひと)。
一朗　おお。
多紀　たまに帰って来ても別に何喋るでもなぐ、ずーっとスマーホスマーホでよー。音楽やるわげじゃねえの。才能あるなんて全然思ったごどながったげど、もういづの間にか、就活もしてねえみだいで。
希穂　へえ。
多紀　あ、賢ちゃんみだいだね。あ、賢ちゃんに才能無いっつってんじゃないんだげどね？　でも、何かねえ・・・。何の話だっけ？
一朗　才能あっかどうがなんて分がりませんけど、
多紀　？
一朗　信じてあげっこどくれえは出来んじゃないですか？我が息子なんだがら。

多紀　・・・、ねえ。

間。

一朗　あと、車動かしてくんにぇえがな。小屋に入れらんねえのよ。
多紀　あーらごめんあさっせ。

と、多紀、帰ろうとする。

希穂　え、多紀さん、
多紀　(立ち止まり)ん？
希穂　、何しに来らったの？
多紀　、？　あ、忘っちまった(笑)

多紀、出て行く。

希穂　いっつも。
寛　(笑)

間。

希穂　(一朗に) ん？
一朗　(希穂に)・・・見舞いさ、来(こ)ー。
希穂　・・・。

希穂、酒蔵へ逃げようとする。

一朗　顔見せでやれ。
希穂　言ったべした。
一朗　そんでも。
希穂　・・・。
一朗　、思い出すがもしんねえべ、そのうぢ。
希穂　いづよ、そのうぢって。
一朗　・・・。
希穂　入院してがら忘れらっちぇぐ一方だべした。行ぐ度に忘れらっちぇぐ。
一朗　・・・でもよ、
希穂　いづ行っても、お兄ちゃんの話ばっか。賢太郎、賢太郎、っつって。
一朗　・・・。
寛　・・・。

忠道、入って来る。

忠道　(一朗に)ああ、お帰んなさい。
一朗　あ・・・、間に合うがいね？

忠道　ああ？
一朗　立春朝搾り、
忠道　おお、もうちょい踊らしたら仲(なが)仕込めっから、あど留(とめ)問題なげれば、うん。
一朗　うん。
忠道　舐めんでねぇよ？(笑)
一朗　(苦笑)
忠道　あら多紀さん帰っちまった？
寛　はい。
忠道　何だー落ぢ着ぎのねえ女だごど。
一朗　着替えでくる。

と、一朗、室内に入って行く。

忠道　・・・具合良ぐねえの？
希穂　うん？
忠道　女将(母)。
希穂　ああ、うんう、
寛　・・・。
忠道　何。
希穂　今年も、忠さんの朝搾り飲みっちーって。
忠道　(笑)
希穂　忠さんは大丈夫なの？
忠道　ああ？
希穂　なんか、目？
忠道　ああ。朝搾り仕込み終わったら、病院行ぐ。
希穂　無理しないでね。

間。

希穂　ん？
忠道　俺はあど何年、酒造れっかなあ・・・。
希穂　そな、そんな、明日死ぬみでえなごど言わないでよ！！
忠道　死なねえよ！！(笑)
希穂　(笑)
忠道　俺が守んねえで誰が徳一の味守んのよ。四代目に申し訳立だねえべ。
希穂　お祖父ちゃん。
忠道　おう。・・・ぜーんぶ、四代目のお蔭なんだがら。
希穂　・・・。
忠道　憎まれジジイ世にはばかるだ。(笑)

忠道、寛を気にしながら希穂をチラチラ見ている。

希穂　、ん？
忠道　、あどでー、ちっと見でくんにぇ？

希穂　え？（と、立ち上がる）
忠道　あ後で良いんだ、
希穂　何？
忠道　温度。ちっとぼやげっちまって（苦笑）
希穂　ああ、
忠道　呼びさ寄越すがら、尾辻。
希穂　はい。
忠道　五代目には内緒な。
希穂　、うん。

忠道、希穂の頭をごしゃごしゃと撫でて、酒蔵へ去る。
希穂、髪を直す。

希穂　・・・。
寛　ん？
希穂　震えでた。
寛　？
希穂　手。忠さんの。
寛　・・・。

一朗、蔵人の恰好に着替えて入って来る。

一朗　米麹イマイチだったのがもしんねえな。
希穂　ん？
一朗　だって終わってんべな踊り、普通だったら。
希穂　ああ。
一朗　発酵に時間掛かってんだべ。
希穂　かもね。
一朗　んだがら乾さんどごの米、最後に回したんだべ？
希穂　ああ残り？
一朗　うん。
希穂　かもね。
一朗　天下の忠さんも遂に目が狂ったが？(笑)

一朗、酒蔵に向かっていく。

希穂　・・・。
寛　・・・言ってねえんだ。
希穂　ん？
寛　お義父さんに。目。
希穂　、ああ、ね。
寛　うん。
希穂　心配掛げっちぐないんでしょ。
寛　雇い主なのに。

希穂　雇い主だがらだよ。
寛　んー・・・。
希穂　・・・死んだ祖父ちゃんが拾ってながったら、忠さんみだいな人は生ぎていげないでしょ、もう、このご時世に。
寛　、まあなあ・・・。

多紀、慌てて入って来る。

希穂　あ、
多紀　思い出したの！
希穂　はい。
多紀　言わんねっかなんながったごど！
希穂　何ですか？
多紀　ビッグニュースビッグニュース！
希穂　何？
多紀　あの、賢ちゃん連れで来たトレンディウーメン、
希穂　はい。
多紀　なんと、なんとだよ？　「ナゴミ」の社員さんなんだってよ！！
希穂　・・・、
多紀　びっくりしたね！　びっくりしたね！　ね！
希穂　、知ってます・・・。
多紀　ん？
希穂　はい。知ってますね。
多紀　・・・えー、（と、寛に振る）
寛　知ってました。
多紀　、あー・・・、あ、知ってだ。
希穂　はいー。
多紀　、あー・・・。あー・・・。あぁ～ん。

と言いながら、多紀、去って行く。

暗転。

●5．渉外　造り　仲、留

一月中旬、夕方。

治、奈緒美、田知本が居る。
治は、デジタルで文字盤の大きな温度計を持っている。
田知本が治に話し掛けていたようだが、そこに奈緒美が横入りしたようだ。

奈緒美　（田知本に）え、何なの？
田知本　何なのと仰られましてもですね、
奈緒美　セフレ？
治　　！
奈緒美　セフレなの？
田知本　セフレ？(笑)
奈緒美　セフレなんでしょ？ただの。
田知本　えーっと、ちょっと意味が、
奈緒美　しらばっくれんじゃないよ。
田知本　ですから意味が、
治　　セックスフレンドのことですよ
田知本　うんそれは知ってる、知ってるんだけど、急にそんな、ちょっと何を仰っているのか、
奈緒美　だからセフレなんでしょって言ってんの！（治に）ねえ？
治　　え、僕？
奈緒美　うん。
治　　僕はそういうのはしない主義ですし、年上はちょっと、
奈緒美　あんたじゃないよ賢太郎。
治　　え？
奈緒美　賢太郎の、ただのセフレでしょっつってんの。
田知本　や、ちょっとほんと何を、（治に）すいません。
治　　セフレなんですか？
田知本　違うから！
奈緒美　セフレでしょ？
田知本　その、ただのセフレって何ですか(笑)
奈緒美　何がおがしいのさ。
田知本　や、だって、(笑)
奈緒美　あのね、ネタは上がってんですよ。
田知本　ネタ？
奈緒美　見だっつってんです、色んな人が。
田知本　何をですか。
奈緒美　あなたと、賢太郎。
田知本　のセックスを？
奈緒美　、車で、二人で、
治　　車で？
田知本　セックスを？
奈緒美　ちが、

田知本　違うんですか？
奈緒美　違う、その、
治　違うんだ。
奈緒美　車で、二人して、ホテルに、
田知本　あー。
治　モーテル？
奈緒美　え？
治　あのバイパスんとごの、モーテル？
奈緒美　や、東横イン。
治　東横イン？
奈緒美　東横インー、に、インして行ぐ姿を！　見だっつってんですよ色んな人が！
田知本　、はあ。
奈緒美　・・・どうなんですか。
田知本　何がですか？
奈緒美　どういうことですか。
田知本　えっと・・、
治　色気がない？
奈緒美　は？
治　東横インだと。あいやむしろアレか。むしろエロいかもしれないですね。そういう、あえて普通の、
奈緒美　違うでしょ？　二人でホテルにっていう
田知本　え、え、え、仮にそうだったとして、何が問題なんですか？
奈緒美　あぁ？
田知本　えぇえぇ二人でインしましたよ？東横インに。同じベッドにインしたかもしれないし、ベッドでナニを何にインしたかもしれませんよ。
治　わあ、
奈緒美　うそ、
田知本　や、してませんけどね！？
奈緒美・治　あ、
田知本　してませんけれども、でも玄戸くん助手席に乗せてたのは事実ですし、ほら
奈緒美　ほら事実、
田知本　だからあの人車無いから、
奈緒美　免許が無いんでしょー。
田知本　はい無いですね無いですし、ホテルのユニットバス貸してるのも事実ですよ。
奈緒美　ほらー！！
田知本　だからそういう目で見たらそういう関係だって思われても仕方ないかもしれません、
奈緒美　そういう関係なんでしょう？
田知本　でも全然ないですからね？そういう感情。
奈緒美　・・・だ、
田知本　はい。
奈緒美　、や、気持ちが、気持ちがあろうとながろうと、二人で一つの部屋にインしてだことは事実なんでしょう？
田知本　事実です事実ですよ、
奈緒美　だったらその、

田知本　事実ですけど、
奈緒美　そこ、密室じゃないですか！
田知本　密室って(笑)
奈緒美　密室だもん！　だから、その、その中で何が行われでいだがは、グレーゾーンじゃないですか！　見えねえんだがら。
治　ああ。
奈緒美　でしょう？
治　限りなく黒に近いグレーですね。
奈緒美　もう、グローですよ。
治　、グロー？
奈緒美　グロー。
田知本　、グレーで、何がいけないんですか？
奈緒美　、えぇ？
田知本　（私は）大人の女。（治を示しながら、賢太郎も）大人の男。
治　え？
田知本　（私は）独身。（治を示しながら、賢太郎も）独身。
治　既婚です。
田知本　玄戸くん。
治　ん、あぁ、ああ。
田知本　妙齢の独身男女が二人、仮にセフレだったとして、何が問題なんですか？
奈緒美　妙齢じゃねえ中年だべした、良い年こいで。
田知本　え、えっと、お名前存じ上げませんけど、
奈緒美　奈緒美です。榊奈緒美。
田知本　あの、旦那さん、いらっしゃるんですよね？
奈緒美　！
田知本　結婚してらっしゃいますよね？
奈緒美　何で知ってんですか！　調べだんですか！？気持ち悪い！！
田知本　調べてないです全然興味無いですあなたにはーごめんなさい。
奈緒美　、え、じゃ、
田知本　指輪。
奈緒美　？　えぇ？（指輪は外してきたのに・・・）
田知本　跡、残ってますよ。
奈緒美　！

奈緒美、自分の左手薬指を確認する。なるほど、指輪を外した跡があった。

奈緒美　・・・・。
治　何で？？

操子、蔵の方から入って来る。

操子　何してんの！
治　あ操子、
操子　（治に）温度計は？

治　あ、これ、
操子　（田知本と奈緒美に）あ、こんにちはー。
治　や何か、この人(田知本)に呼び止められて、
操子　えぇ？
田知本　すいません、少しご相談を、
治　うん、あ、田知本さん、
田知本　どうも。
操子　、何の？（相談？）
田知本　酒米について、少しお話をと、
治　そしたら何か、いきなり、（奈緒美を示す）セフレなんでしょー！って。
操子　え！？
奈緒美　・・・。
操子　、ん？（治と田知本を見る）
田知本・治　違う違う違う！
治　この人(田知本)と賢太郎さん！
操子　あん？
田知本　いえ違うんですよ？
操子　はい。
田知本　違うんですけど、この方(奈緒美)が、
奈緒美　・・・。
田知本　急に、ほんと急に、「いかがわしい関係なんでしょ！セフレなんでしょ！」って、けしかけていらっしゃいまして、
奈緒美　けしかげではないですけど、
田知本　けしかけてきたじゃないですかー、
奈緒美　いや・・、（田知本と治を示し）そうなのがなーって思っただけで。
操子　、ん？（治と田知本を見る）
治　違う違うの賢太郎さん！　とこの人(田知本)！
操子　あん。
奈緒美　まあ、違うなら違うで、良いんじゃないですか？
田知本　はあ？
奈緒美　なんぼ言っても、町の人がそうだって言ったらそうなっちまうんですから。
田知本　・・・。

間。

操子　・・・ねえ。
奈緒美　え？
操子　人の気も知らないで。
治　ん？操子？
操子　知らないっていうか、知ってて踏みにじって。
治　おい、
操子　ここ来てる時が一番、一番ですよ。
治　・・・。
田知本　（溜息）

奈緒美　何か・・・、私、バカみだい。
田知本　・・・、ですねえ。
奈緒美　！

賢太郎、蔵から戻って来る。

賢太郎　ん？
田知本　あ、
奈緒美　あ、
治　あ渦中の人。
賢太郎　何？　（奈緒美に）何してんの？
奈緒美　え？
操子　スケベ。
賢太郎　え？
田知本　うん気にしないで大丈夫。
賢太郎　ん？
田知本　え、あった？
賢太郎　あ、あうん、駄目、ぜーんぶ綺麗さっぱり仕込み用に配分されちまってる。一っ粒も残ってない。
田知本　まあそうだよね・・・。
賢太郎　うん。
田知本　え、乾さんのお宅にも、お米は、
治　？
田知本　あの、酒米、
操子　無いですよ？
田知本　ああ、
操子　ぜんぶ、こちらに買い取っていただいちゃってますんで、（賢太郎に）ほんとありがとうございます。
賢太郎　、ああいえー。俺は何も、
治　え、でも残りが、
操子　え？
治　最初の仕込みのじゃなくて、
操子　ああ、
治　うちから出したの、まだ半分、
操子　あれは最後のに回すって、
治　あそっか。
操子　うん。
治　え何だろあんま良くなかったのかな。
操子　え嘘、良過ぎるって言われたじゃん。
治　うん、でも、
操子　プロが、良過ぎるって言ってんだよ？
治　、だよね。
操子　うん。
治　良い米作ったんだよね、僕たち。

操子　治君が。
治　操子のお蔭でしょ。
操子　うふっ。

治、操子、一瞬二人の世界に入る。

田知本　うん、だからもうやっぱり、
賢太郎　ん？
田知本　新規で仕込んで貰うのは諦めて、
賢太郎　えーでも新しい日本酒造った方が、
田知本　それは法律的に難しいって言われたじゃん、
賢太郎　何かあるって絶対、
田知本　や、現実見よう？
賢太郎　え？
田知本　だからやっぱりここは、立春朝搾りをさ、全部ナゴミに、
賢太郎　いやそれだと忠さん何とかしないとじゃん。
田知本　えでも朝搾り言い出したの玄戸くんじゃん。
賢太郎　やまそうなんだけど。いや、もうちょっと弱ってっと思ってたんだけどなー。
田知本　ええ？
賢太郎　ロートル。
田知本　ああ、弱ってるどころか、
賢太郎　ねえ。老いて益々盛んだったかんなー。てかむしろ前より頑固に、ちょっとあれは想定外、あ、そうだ（治と操子に）忠さんブチ切れてたよ？
治　へ？
操子　あ。
賢太郎　一秒で味変わっちまーんだぞー！！って。
操子　あこれ！（温度計）
治　あ、やば。
操子　早く。

と、操子、治、慌てて酒蔵へ向かおうとする。
治、立ち止まり、振り返る。賢太郎と田知本を見て、

治　へー。
操子　（治の方を振り返り）ん？
治　や、こういう感じなんだー、と思って。
操子　？　セフレ？
治　うん。
操子　あー。
賢太郎　は？

治、操子、酒蔵の方へ去って行く。

賢太郎　何？

田知本　気にしないで大丈夫。
賢太郎　、うん。
田知本　こちらの方が何か、
賢太郎　え？
田知本　うん。
奈緒美　・・・。
賢太郎　え、何？
奈緒美　オバサンて言うな。
田知本　？　え、言った？　私言った？
奈緒美　目が言ってる。
田知本　えー。
賢太郎　え、何？どしたの？
奈緒美　？　えぇ？
賢太郎　うん。
奈緒美　え、うん、何か。・・えへ(笑)
賢太郎　、うん。
奈緒美　世間話？
賢太郎　？　やちょっと今そういう時間じゃないんだよねごめん。
奈緒美　え何、二人の時間？
賢太郎　は？
奈緒美　私、お邪魔虫？

賢太郎、田知本、顔を見合わせる。そして、奈緒美を見る。

賢太郎　、いや・・・、

間。

奈緒美　あ、あれ観たよー。
賢太郎　ん？
奈緒美　映画？
賢太郎　え嘘、
奈緒美　面白がったよ。
賢太郎　えどこで？
奈緒美　何か、ネット？
賢太郎　え嘘、
奈緒美　うん何かネット？　あって。あったがら、観た。
賢太郎　誰だよアップしたの・・・。
奈緒美　誰だろうねー。
田知本　え、どれ？
奈緒美　え？
田知本　どれ観たの？
奈緒美　あーの、「マルクスのニッポン旅しぐれ」
田知本　えー！

賢太郎　うわ。
田知本　懐かしいー！！(笑)
奈緒美　ちょっと難しかったげど、
田知本　ってかあれ、出てましたよ？私(笑)
奈緒美　え？
田知本　はい、少しですけど。
奈緒美　え、え、え、どの役！？どの役！？
田知本　あーの、旅館の仲居、
奈緒美　あー！
田知本　マルクスが口説いて振られる、
奈緒美　あー！　あー！　あぁぁぁー！！
田知本　はい(笑)
奈緒美　え？　女優さん？
田知本　ややや、いやいやいや、
奈緒美　え？
田知本　どうしても役者が居ないから、って。
奈緒美　へー、え、(しっかり田知本を見ながら) ずいぶん、変貌を遂げましたねえ・・・。
田知本　老けたって仰りたいんでしょうかねえ。
奈緒美　(笑顔で) 黒歴史ですか？
田知本　、はい！
奈緒美　(賢太郎に) えー、でも、うん、面白がったよ。
田知本　え、あれ凄いオナニー映画じゃない！
奈緒美　え？
田知本　うん、中でもよりオナニーのやつ(笑)。
賢太郎　、監督を前にして・・・、
田知本　あごめんね(笑)、でもそうでしょ？
賢太郎　や、あれは、資本主義経済における唯物史観と日本の原風景の対比の中から
田知本　はあ？
賢太郎　弁証法的な解をさ。
奈緒美　あぁー。
田知本　、え、意味分かってる？
奈緒美　ん、難しいことは分がりませんけど、でも、分がらなくても、面白がったよ？
賢太郎　、あ、ありがとう。
奈緒美　何か、一口に分がんないもんじゃないですか？アートって。
賢太郎　・・・。

間。

田知本　、ファン。
奈緒美　？
賢太郎　ん？
田知本　ファンなんだよ、この人、
奈緒美　え、
田知本　玄戸くんの。分かった。(奈緒美に) ね！

賢太郎　幼馴染だよ？
奈緒美　・・・。
田知本　黙ったー！
奈緒美　うるさい！
賢太郎　え、どういうこと？
奈緒美　・・・。
田知本　え嘘、アレですか、昔好きだった系の、アレですか？
賢太郎　え？
田知本　ん？
賢太郎　え何で？
田知本　やだって、指輪外してきてるし、
奈緒美　ちょ！
賢太郎　え？でも旦那、
奈緒美　はい家庭がありますので。
田知本　じゃ何で外して？
奈緒美　もう良いじゃないですか。未婚の方には分からないと思いますよ。
田知本　・・・。
賢太郎　・・・えーと、
田知本　え、何しにいらしてるんですか？
奈緒美　ですから！　世間話だってさっき！
田知本　私は仕事の話で来ているんです！　邪魔しないで下さいよもー。
奈緒美　・・・私だって・・・。私だって・・・。

寛、帰ってくる。

寛　ただいまー。
賢太郎　あ、お帰んなさい。

寛、室内の雰囲気に驚く。

寛　何？
賢太郎　何でもない。
寛　・・・。めっかったんすか？米。
賢太郎　、や・・・。
寛　あそう・・・。
賢太郎　・・・。

寛、気にしながらも、室内へ入っていく。

間。

賢太郎　（田知本に）寛くん。
田知本　うん。・・・会津中回ってどこにも無いんだから、
賢太郎　ん？

田知本　別な手考えるしかないでしょ。酒米手配出来ない以上。
賢太郎　朝搾りは厳しいと思うよ。
田知本　それ何とかなんないの？
田知本　正直、別な酒蔵行っても良いんですけどね？私的には。
賢太郎　え、や、ちょ待ってよそれは、話が、
田知本　話違うのそっちじゃん！　国内に全然流通してない酒があるって言うから来てんのに、
しかも実家だから話付けやすいって、
賢太郎　それは、
田知本　一ヶ月！　一ヶ月、このドカ雪の中、一ヶ月毎日、農協周って頭下げて、農家周って頭
下げて、どこ行っても無いって言われて、よその酒蔵まで行って酒米寄越せって言って
門前払い喰らって、酒蔵行ってんのに飲めないし車だから、
賢太郎　それはごめん。
田知本　雪道運転上手くなる上手くなる。
賢太郎　、良かった。
田知本　良くないよ！！
賢太郎　・・・・。
奈緒美　健気ですね。
田知本　、バカにされました？
奈緒美　いえ。
田知本　必死なだけですよ。・・・契約取んなきゃ帰れないんですから。
賢太郎　え？
田知本　・・・・。
奈緒美　あ、先に言っちまってんですね？
田知本　・・・・。
奈緒美　勝手に？
田知本　・・・・。
奈緒美　・・・自分の身、守りたいだけじゃないですか。
田知本　いや・・・・、
奈緒美　ねえ？
田知本　実際、美味しかったんですよ！　この蔵のお酒。
賢太郎　・・・ありがとう。
奈緒美　(笑)
田知本　何ですか。
奈緒美　東京さかぶれだ黴菌と、売れ残りの備蓄米が、二人してどんな酒造るつもりなんですか
ね。
田知本　？
賢太郎　えちょっと上手いこと言った？
田知本　もう良いよ無視しようこの人。
賢太郎　や・・・・。え、奈緒美、お前何か、(思い付いてるな？)
奈緒美　ん？
賢太郎　何だ？
奈緒美　え？
田知本　嫉妬でしょ？
賢太郎　ちょっと待って。(奈緒美に)なあ。(何思い付いたの？)

間。

奈緒美　・・・思い付きだけど。
賢太郎　うん。

寛、出てくる。手には入浴セット。

奈緒美　・・・立春朝搾り。
寛　風呂行ってきます。

と、出て行こうとするが、以降のやりとりを気にしている。

賢太郎　はーい。
奈緒美　瓶詰めして卸す酒屋がら、一升瓶全部買い占めだら良いんでない？って、
田知本・寛　！？
奈緒美　思ったの。二月に。
賢太郎　それ！か？
奈緒美　ちっと強引かもしんねえげど。
田知本　や、でもそれ、
奈緒美　どうせ何本か余んだがら徳一の酒なんて。
賢太郎　、一言多いよな。
奈緒美　だってそうだべした。地元の人すら飲んでくんないんだがら。
賢太郎　そうなんだ。
奈緒美　そうだよー。若い人はみーんな、そちらさんみだいな、やっすいチェーンさ奪わっちぇ、
家でなんか飲まねえし、飲んでくれる年寄りはどんどん死んでぐし。
賢太郎　よく知ってんね。
奈緒美　調べだのよ。こないだ、帰ってがら。
田知本　健気～。
奈緒美　うっせ。（うるさい）
田知本　でもさ、一旦店に並んだやつでしょ？　卸値じゃ売ってくれないんじゃ、
奈緒美　まそうがもしれませんけど、
田知本　ねえ？
寛　（唐突に）原価率は悪いがもしんにぇえげど、
奈緒美・賢太郎・田知本　ん？
賢太郎　え？
寛　市場価格で買ったら。
賢太郎　、はい、
寛　そんでも、まずは先行投資として、幻の酒っつって認めで貰えだら、来年も交渉しやす
ぐなんでねえの？
田知本　確かに。
賢太郎　、寛？
寛　、うん。

寛、出て行こうとする。
賢太郎、田知本、奈緒美、寛を見ている。
寛、引き返して、

寛　上手いごど年間契約貰えんなら、
賢太郎　ん？
寛　そっから予算立てやすくなっぺした。したら設備投資して、人増やして、っつうプランも現実味帯びんじゃねえのがな？
賢太郎　え、いつから味方に？
寛　そんなよ、今年の分だげでも何十万本までは行がねえんだがら全部でも。
賢太郎　朝搾り？
寛　うんー。酒屋で百本買っても二十万だべ？
賢太郎　ああ、
寛　五百本買い占めで百万円。
賢太郎　百万・・・、
寛　や、それが、たとえば来年一万本になっとしたら？
賢太郎　あー、
寛　な？
賢太郎　まあ。
寛　五百本あれば、(田知本に)そちらさんで限定で出す分くらいは確保でぎんでねえの？
田知本　あの、五百ではさすがに、全店舗とはいきませんが、あのそこまで小さくはないので(笑)
寛　ああすいません。
田知本　いえ、でもたとえば、都内の特定ブランド店のみで提供して試す分には、はい、現実的な数かもしれません。
寛　ほら！
賢太郎　・・・。
寛　ただ、日持ぢしねえらしいがら、
田知本　立春朝絞り。
寛　うん、出せる期間も限られんだげっちょ、
田知本　でも、
寛　、うん。
田知本　期間限定数量限定の、幻の酒。ですね？
寛　でしょ。
田知本　フゥッ！
賢太郎　・・・。
寛　まあ、聞き流してくっちぇ良いよ。
賢太郎　や、でも、そんなことして、酒屋さんに睨まれない？
寛　小売から買うだげだもん！　むしろ、大歓迎だべ。
賢太郎　、あー・・・。
奈緒美　私交渉しようか？
賢太郎　え？　何で？
奈緒美　酒屋の息子何人教えできたど思ってんの？
賢太郎　・・・。
寛　(笑)

寛、出て行こうとする。

賢太郎　でも、

寛、振り返り、

賢太郎　・・・恥ずかしい話、先立つものが。
寛　金？
賢太郎　その百万が・・・。
田知本　あるよ。
賢太郎　、いや、そこまで世話になるわけには、
田知本　良いんだよ、貯まっても使うアテないんだから。
賢太郎　、じゃあ。お言葉に甘えて！
田知本　、言い出すの待ってたくせに。
賢太郎　(笑)
田知本　ほんと変わってないよね。
賢太郎　(苦笑)
奈緒美　・・・。
寛　したら、二月四日だ。
田知本　立春？
奈緒美　エックスデー。
寛　酒屋もみんな手伝いさきてどんどん出荷さっちぇぐがら、もう、それ追っ掛げまぐんだな。
田知本　雪降んないと良いなあ・・・。
賢太郎　あ、
寛　ん？
賢太郎　あの、でも、
寛　何。
賢太郎　・・・、希穂が、希穂は、大丈夫かな？
寛　・・・何でこごさきて及び腰んなってんのよ。
賢太郎　や、寛がこっちに付いてくれたってのは、心強いんだけど、
寛　は？
賢太郎　ん？
寛　別に、先輩の味方になったわげではねえんだげど。
賢太郎　、え、
寛　、許したわげじゃねえし。
賢太郎　・・・、まあ、
寛　ただ、この蔵、このままじゃまずい、って思ってくれでんでしょ？
賢太郎　、はい。
寛　そごは、おんなじだがら。
賢太郎　！！
寛　志は一緒。
賢太郎　・・・ありがとう。

寛　・・・・。

寛、右手を差し出す。

賢太郎　・・・・。

賢太郎、寛の手を握り返す。

田知本、奈緒美、私達も握手をする？の？と、探り合う。

暗転。

●6．係累　立春朝搾り

二月四日。立春。早朝。
立春朝搾りが始まっているようだ。
昨晩から夜通し、忠道をはじめとする蔵人たちが、圧力をかけないよう丁寧に、じっくりと絞っている。
また、徳一が卸している得意の酒屋が、瓶詰めを手伝いに来ているらしい。
尾辻が、伝票と卸先のリストをチェックしている。

尾辻　・・・あ、今年来てねえんだ玉ノ屋・・・。

忠道、家側から入って来る。トイレから戻るところのようだ。

尾辻　あ、
忠道　おう。
尾辻　、お疲れ様です。
忠道　・・・、見ねって良いのが。
尾辻　はい？
忠道　朝搾り。
尾辻　、え、だって、蔵元が、
忠道　ああ？
尾辻　事務所でリストチェックしといで、って。
忠道　ああ希穂ちゃん。
尾辻　はい。
忠道　そうが・・・。
尾辻　はい。
忠道　、まあ、百年早ぇっつうごっだ。
尾辻　・・・。
忠道　うん。
尾辻　乾さんだぢ、筋良いすもんね。
忠道　・・・。お祓いは、来いよ。
尾辻　あ、はい。
忠道　・・・ん。

賢太郎が入って来る。明らかに寝起きである。

賢太郎　おー
忠道　ん？（目を細めた）
尾辻　あお早うございます。
賢太郎　お早う。
忠道　あー賢坊が。
賢太郎　うん。
忠道　賢坊は、手伝わねえのが。

賢太郎　ん？
忠道　搾り。
賢太郎　え駄目でしょ。ってか、駄目でしょ。
忠道　せっかぐ戻ってきたっつのに。
賢太郎　希穂が嫌がっから。
忠道　、ん、そうが。
賢太郎　、うん。っつーか、忠さんが、駄目って言ったんじゃないの？
忠道　ああ？
賢太郎　あ、いや。いいや。（話を変えて）凄いね、外。
忠道　あ？
賢太郎　あんな来てたっけ？昔から。
忠道　酒屋？
賢太郎　うん。
忠道　いや、増えだのよ、六代目んなってがら。
賢太郎　ああ。
忠道　うん。なんか、ちっちぇえ飲み屋だのも来てるみでえだ。
賢太郎　（あくび）
忠道　あど外人。
賢太郎　凄いね、こんな朝っぱらから。
忠道　（笑）朝搾りの日に寝でるようでは話んなんねな。
賢太郎　、え？

酒蔵の方から、希穂の声が響く。

希穂(声)忠さーん！！
忠道　あぁ油売ってらんにな。

忠道、酒蔵の方へ去る。

尾辻、リストチェックをしている。
賢太郎、尾辻の方を見ている。

尾辻　？
賢太郎　何見てんの？
尾辻　今日来てるリストです。
賢太郎　え？
尾辻　朝搾りの卸先。
賢太郎　！？
尾辻　？　取引先一覧です。

賢太郎、覗き込もうとする。

尾辻　何すか。
賢太郎　いや？

賢太郎、誤魔化しながら、外の様子を伺う。

賢太郎　・・・このクソ寒いのによく待つよね。
尾辻　はい？
賢太郎　ん。（外の連中、と仕草）
尾辻　ああ。
賢太郎　ね。
尾辻　日本酒のボジョレー・ヌーボーっすから。
賢太郎　？　解禁？
尾辻　見せ場なんですよ、恒例行事。
賢太郎　その行事に、参加させて貰えてないわけだ。
尾辻　・・・今年は。
賢太郎　あ去年は搾ったんだ？
尾辻　、はい。
賢太郎　立春。
尾辻　ええ。
賢太郎　俺一回も手伝ったことないんだよね・・・。
尾辻　・・・大変なんすよ。搾りの日決まってるっつうのは。
賢太郎　え？
尾辻　杜氏泣がせなんすよ。
賢太郎　そうなの？
尾辻　二月四日って決まっちゃってっから。早すぎでも遅すぎでも駄目だし。醪の具合見ながらぴったりに合わせねっかなんないんで。
賢太郎　、あそうなんだ。
尾辻　データは無いですから。この米ならあど何日持づがなあ、どが、見で。酵母と麹の気分次第なんで。
賢太郎　、へえー・・・。
尾辻　必要なのは、長年の経験と、勘なんです。
賢太郎　ふーん。
尾辻　なのに、経験させてもらえない僕なんです僕はどうしたら良いんでしょうか・・・。
賢太郎　・・・あ、お悩み相談だった？
尾辻　はい。
賢太郎　朝っぱらから。
尾辻　本当は自分なりに酒造ってみだいんですよ。だがらこんな小っちぇえ酒蔵来てんのに・・・、全然やらして貰わんに。
賢太郎　んー。何か、あるんだろうね。
尾辻　えぇ？
賢太郎　何か。原因が。尾辻くんに。
尾辻　僕にじゃないですよ忠さんが認めでくんないがらですよ！
賢太郎　あ人のせいなんだ。
尾辻　・・・、潮時っすかねぇ。
賢太郎　昔っからだから。
尾辻　え？

賢太郎　三年目っつったっけ？
尾辻　え？　あ、はい。
賢太郎　もってる方だよ。
尾辻　何がですか？
賢太郎　二年以上いた人見たことないもん。
尾辻　え？
賢太郎　・・・育てらんないんだよ、あの人。
尾辻　そうなんですか？
賢太郎　身を持って知ってんじゃん。
尾辻　んまあ。駄目出しするくせに正解教えでくんないすからねえ。
賢太郎　だろ？
尾辻　はい。
賢太郎　癌なんだよ。
尾辻　、え癌だったんですか？
賢太郎　ん？
尾辻　忠さん。
賢太郎　うん。この蔵のね？
尾辻　蔵の？
賢太郎　うん。
尾辻　蔵の癌・・・。

間。

賢太郎　元々、越後杜氏だったらしいんだけど、
尾辻　はい。
賢太郎　うちの前に通ってた蔵で、若いのに先輩何人か抜いて親方に抜擢されて、それで調子ん乗ったんだろうね、何か、気緩んだのか、変な菌出して蔵の酒全滅させちゃったんだって。
尾辻　え、それ・・・、
賢太郎　ま若いっつっても四十くらいだろうけど。
尾辻　火落ち菌・・・？
賢太郎　っていうの？よく知らないけど。
尾辻　蔵の酒全滅って言ったら火落ち菌だと思いますけど。
賢太郎　え何かそれ、蔵潰す菌？
尾辻　はい、一回出ちゃったら、そごがら何年も出で行がないから酒なんか造れなぐなって、
賢太郎　そうそうそう何かそんなん！
尾辻　他の蔵でもそんな杜氏嫌がっから、杜氏としても食いっぱぐれるって、
賢太郎　何か凄いんでしょ？
尾辻　凄いっていうが、ヤバい。
賢太郎　うん。
尾辻　ヤバい。・・・えー・・・。まさかだぞ・・・。
賢太郎　まそれを、うちの祖父さんが拾ったんだって。
尾辻　へぇ・・・。
賢太郎　感謝すんのは良いけど、いつまでも居座られてもさ。

尾辻　知りませんでした・・・。
賢太郎　希穂だって、困ってっと思うんだよね。
尾辻　うわー・・・。
賢太郎　だって今、あいつが、蔵元杜氏なんでしょ？
尾辻　火落ち菌出したんだあの人・・・。
賢太郎　居座るだけならまだしも、こうやって、前途有望な善玉菌をガンガン刈り取っちゃうんだから。
尾辻　ねえ。
賢太郎　？
尾辻　本当ですよもう。・・・、え、火落ち？？

多紀、入って来る。手には、真新しい杉玉。

多紀　お早うございますー。
賢太郎　あどうもー。
多紀　寒いねー氷点下だよ氷点下。
尾辻　お早うございます。
多紀　(賢太郎に)あら。聞いだよー「ナゴミ」と夜のお友達なんだって？
賢太郎　、ん？　何か、
多紀　あほら尾辻くん、これ。(杉玉)
尾辻　はい？
多紀　手伝ってくろ、
尾辻　え？
多紀　軒に吊んの、蔵の、
尾辻　あ、え、僕でも、
多紀　搾りやらして貰わんにんでしょ？知ってっから、良いがら、みなまで言うなみなまで言うな、お姉さんちゃーんと分がってっから。尾辻くんの気持ちもお見通しだがら。ほらこっちゃ、

と、多紀、蔵の方へ行こうとする。

尾辻　多紀さん、
多紀　ほん？
尾辻　僕、これ（リストチェック）やんねっかなんないんです。
多紀　何、んな手わすらみでえな仕事、んなの女さ任して、ほら、手伝ってくろ、あんた身長くらいしか取り柄ないんだがら。
尾辻　？　えそんな高ぐないですけど・・・
多紀　朝搾り配る前に吊っちまわねどなんだって、ほら、

多紀、蔵の方へ去る。

尾辻　・・・。
賢太郎　頑張れ。
尾辻　、はい。

尾辻、リストを置き、多紀を追って去る。

賢太郎、尾辻がチェックしていた伝票と卸先のリストを取り、見る。
何か思い付き、携帯電話を出し、そのリストを一枚ずつ写真に収めていく。

賢太郎　この酒、全部だもんなー。

改めて、リストを眺めている。

賢太郎　へーー・・・。(何かに気付いた)　！！

賢太郎、リストと一緒になっていた書類を見る。改めて驚き、室内から、徳一酒造の決算や通年予算の伝票を探して、抽斗という抽斗を開け、書類という書類を見て回る。一つ、重要な書類を見付ける。決算書である。

多紀、蔵の方から入ってくる。

賢太郎　！？
多紀　？　なーにゴキブリみだいな顔してー。
賢太郎　ん？
多紀　ほら、お祓いだぞい。お祓いぐらい混ぜで貰いっせよー。
賢太郎　、ああ。
多紀　賢ちゃんも、玄戸家の人間なんだがら。
賢太郎　そうですね。

寛、出勤準備を整えて出てくる。

多紀　あらお早う！
寛　あ、
賢太郎　あお早う。
多紀　なーに早いんでねえの？
賢太郎　もう出勤？
寛　(小声で)間に合わながった。
多紀　んなになんだって？
寛　や。
多紀　寛さんも今年は混ざらんしょよー。
寛　ああ、
多紀　お祓い。
寛　俺は、良いんす。
多紀　何でー。
寛　役場早出ですから、
多紀　そんな、すーぐ終わんだがらー。毎年毎年サボってんべした。
賢太郎　え？

寛　ま造りやってないですから。
多紀　ほら、神主さんだってお待ちかねだぞい。
寛　、ハハ。
多紀　待ってっかんね、出ないとは言わせないがんね。
寛　はーい。
多紀　あんま待だせんでないよ、
寛　、はーい。
多紀　・・・出んの？　出ねの？
寛　、ハハ。
多紀　出んだよ？　・・・出んのね？　出んだね？　出んだな。出んな。

と言いながら、多紀、出て行く。

寛　・・・。

賢太郎、決算書を見ていたことを寛に気付かれまいとしている。

寛　めっかっちまいました・・・(笑)
賢太郎　え、え？
寛　始まる前にど思ったんですけど、
賢太郎　あ、ああ。
寛　間に合わながった。
賢太郎　そうなんだね。

寛、抽斗が開いていることに気付く。

寛　？
賢太郎　あ、

賢太郎、慌てて閉める。

寛　・・・先輩、
賢太郎　？　うん？
寛　それは駄目でしょう。
賢太郎　ん？
寛　ルール違反でしょう。
賢太郎　いや、
寛　家族だっつっても、見で良いもんと悪いもんっつうのがあんべした。
賢太郎　・・・ごめん。
寛　いえ。

賢太郎、決算書をおとなしくしまおうとする。

寛　ちょ、

賢太郎　ん？
寛　見して。
賢太郎　、ん？
寛　チラッとで良いんで。
賢太郎　え、
寛　チラッと。
賢太郎　え、知ってんじゃないの？
寛　見せでくんなぐなったんです最近。
賢太郎　そうなんだ・・・。
寛　・・・チラッと。
賢太郎　・・・ちょっとだけな。

賢太郎、決算書を寛に渡す。
寛、恭しく受け取り、見る。じわじわと表情が変わる。顔を上げる。

寛　！？
賢太郎　な！？
寛　はい。
賢太郎　おかしいだろ？
寛　ありえねえ。
賢太郎　だろ？
寛　やー、やっぱな。
賢太郎　え、粉飾？
寛　逆です、足りな過ぎんだ。
賢太郎　だから、安い方に、
寛　安ぐ粉飾したって意味ねえでしょ、
賢太郎　いや税金逃れとか、
寛　え？
賢太郎　だから見せなくなったんじゃない？お前会計課だろ？　バレだら
寛　違う違う違う、
賢太郎　え？　じゃあ・・・、
寛　良いすか先輩、
賢太郎　はい。
寛　単純に、単純にね？
賢太郎　うん。
寛　安過ぎんですよ、徳一の酒は。
賢太郎　、ああ、
寛　昔っからそうなんです。あんなちゃんと造ってんのに、パック酒と変わんないじゃないすかこんなん。
賢太郎　・・あぁ！
寛　でしょ？　そんで、これ、
賢太郎　ん？（と、決算書を覗き込む）

蔵の方から、歓声と拍手が聞こえる。朝搾りと瓶詰めが完了したようだ。

希穂、治、一朗、忠道、操子、蔵の方から入って来る。

賢太郎　・・・。

希穂、治、一朗、忠道、操子、外への出入り口に向かいながら、

希穂　や本当、手付きが良いんですよ。
治　本当ですか？
希穂　どこで勉強したんですか？
治　ネットです。
希穂　ネット凄いですね。
治　えへへへ。
操子　治くん。（と、腕を引く）
治　ん？
忠道　来年から蔵人だな。
操子　そんなそんな(笑)
忠道　（一朗に)なあ？
一朗　(苦笑)
忠道　だって暇だべした冬場、

希穂、賢太郎と寛に気付き、立ち止まっていた。
人々、何となく止まらざるを得ない。

希穂　何？
賢太郎　・・・。
希穂　来る？
賢太郎　あ？
希穂　お祓い。寛くんも？
寛　や、
賢太郎　、何これ。
希穂　？　紙？
賢太郎　決算。
希穂　、何でそれお兄ちゃんが見でんの。
賢太郎　何、これ。
希穂　・・・。
賢太郎　おかしいだろこの数字！！　どういうことだよ！！
希穂　（人々に）行ってで。
一朗　そんでも、
忠道　お祓いだぞ。
希穂　良いよ。
一朗　(治と操子に)行ってで。
治　でも、
一朗　うん。

操子　・・・行こ。
治　や、でも、
操子　良いから、

操子、治を連れて去る。

一朗　忠さんも。
忠道　・・・。（動かない）
一朗　ん。

間。

希穂　何言いっちいの。
賢太郎　・・・全然儲かってねえじゃん。
希穂　それが？
賢太郎　何が景気良い、だよ。何が困ってない、だよ。
希穂　余剰ゼロだよ？　毎年完売。
賢太郎　完売してても！　これ見てどう勘違いすりゃ儲かってるってことになんだよ。
希穂　赤字になってねえべした。
賢太郎　とんとんじゃ先ねえだろうが！
希穂　・・・。
賢太郎　卸値が、安過ぎんだって。（寛に）なあ？
寛　あ？　ああ、
希穂　だがら赤字じゃねえでしょうよって。
賢太郎　そりゃ設備投資も出来ないわ。蔵も変わってねえわけだわ。
希穂　守ってるって言ってよ。
賢太郎　、入院費だって馬鹿んなんねえだろうが、お母さんの。
希穂　・・・。
一朗　賢太郎、
希穂　それはうぢの問題だもん。蔵の問題じゃねえでしょう？
賢太郎　この蔵はお前の家なんだろ？　同じだろ？
希穂　関係ない！！
賢太郎　あるよ！
希穂　・・・ようやぐ、ようやぐ去年、黒字んなったの。それまでずっと赤字だったの。私が、私が頑張ったの。
賢太郎　だからお前がんなに頑張んなくても良いでしょって。ずっと赤字だったのは卸値安いからだろ？
一朗　・・・。
希穂　・・・それが何なの？
一朗　希穂、
希穂　どんな問題なの？　それで今まわってんだがらチクチク言わなぐって良いべした。
賢太郎　お前な、粗利０．２％ってお前、黒字でも何でもないかんね？
希穂　だがら赤字じゃないんだから良いでしょって！　何でお兄ちゃんまで、寛くんとおんなじごど言うの・・・。

賢太郎　え？
寛　・・・や、実際、
希穂　そもそも、何でお兄ちゃん勝手にそれ見でんのよ。
賢太郎　見られるような場所に置いとくなよ。
希穂　置いどいでないんですけど。
賢太郎　・・・。
希穂　え、寛くん？
寛　俺じゃねえよ。
希穂　じゃ何で？
賢太郎　・・や、勝手に見たのは、悪い。ごめん。でも、この財政も、悪い。かなり。
希穂　・・・自腹で映画撮って生活費に困るより良いと思いますけど？
賢太郎　、それ本当関係ねえだろ・・・。

間。

操子(声)　駄目だって！
治(声)　みーちゃんだって気になるって言ったじゃん！

治、戻ってくる。
操子、追ってくる。
人々、乾夫妻を見る。

操子　気になるけど気にしないの！
治　あ・・・・。
操子　あ・・・・、あ、どうぞ、続きを・・・。
賢太郎　・・・・。
希穂　・・・・。
忠道　この蔵の味守っていぐには、そんだげかがるっつうごどだべ。
賢太郎　え、忠さんがそれ言っちゃう？
忠道　ああ？
賢太郎　・・・いや。

間。

賢太郎　(希穂に)なあ。
希穂　何。
賢太郎　この二十年で、物価どんだけ上がったさ？　税金は。酒税、消費税。
希穂　税金なんて対して変わってないよ。
賢太郎　ああ？
希穂　何も知らねえくせして。日本酒相場なんて三十年変わってないですからね？
賢太郎　だ、ちが、そういうことじゃねえよ。何も味変えろって言ってんじゃないの。うちの酒はもっと高く売れるって言ってるんだよ！
希穂　付ぎ合いある酒屋だ卸だ相手に値上げなんかできないでしょ。
賢太郎　そこは商売だろうが。

希穂　それで売れなくなっちゃったら元も子もないでしょう？
賢太郎　売れるって！　え、値上げしたら売れなくなるようなレベルの酒造ってんの？
希穂　それは・・・。
賢太郎　忠さん！
忠道　・・・。
賢太郎　な？　ほんの少し上げるだけで、ほら、一本百円上げるだけで、一万本で百万だぞ？
希穂　うぢが百円上げで困んのは小売りでしょう？　店の人が損して良いの？
賢太郎　うちが損してて良いの？
希穂　じゃあ何、値上げしたらお兄ちゃん買ってくれんの？
賢太郎　何で俺が買うんだよ飲めねえのに。俺は売る側だよ。
希穂　買う側の気持ぢも考えないで売れる売れないなんて分がるわげねえべした。
賢太郎　・・・。
希穂　私達は、買ってくれる、飲んでくれる人の顔考えで、酒造ってんだよ？
賢太郎　・・・。
希穂　(乾夫妻に)ねえ？
操子　、あ、
治　はい！
希穂　顔が見える農業だどが言ってっけどさ、私達だって、見だいのよ、飲んでる人の顔を。

間。

尾辻、杉玉を持って、酒蔵の方から入ってくる。その雰囲気に驚く。
一同、尾辻を見る。

尾辻　！　あの、ペンチ・・・、
希穂　どうぞ。
尾辻　すませーん・・・。

尾辻、工具の入っている抽斗に向かい、ペンチを探し始める。

賢太郎　・・・あのさ、言わないどこうと思ったけどさ、
希穂　何。
賢太郎　（希穂に）忠さんに払ってる給料、何これ。
希穂　・・・。
賢太郎　十二万。
治・尾辻　え、
忠道　・・・。
治　安いの？
操子　分かんない。
尾辻　僕より少ない・・・。
希穂　・・・。
賢太郎　月収十二万って、何時代よ？
治　あ安い方？
忠道　俺は、住まわして貰ってんだもの。

賢太郎　そういう問題じゃないでしょ！
忠道　不満は無えよ？　貯金も無えげど。
賢太郎　違う！！
忠道　何が違うの。
賢太郎　金額じゃなくて。仕込みも搾りもやんない時期も払ってるって何なの？って。
忠道　・・・、夏は出来っこどねえし。
賢太郎　何でこの人を、そんなに優遇してんの？　もうすぐ死ぬんだよ？
一朗　賢太郎！！
賢太郎　何！！
一朗　おめえには、人を敬う気持ぢっつーもんはねえのが！
賢太郎　蔵元は親父だろ！？
一朗　俺は造り下手糞だったんだがら杜氏に頼るしかねえべよ！
賢太郎　だから、忠さんが居なくなったらどうすんの？　って話。誰が酒造れんの？って。
一朗　・・・。
忠道　・・・。
尾辻　あの、僕が
寛　俺はね？
希穂　・・・何。
寛　それ、払うなって言ってたんじゃないの。
希穂　じゃ何。
寛　忠さんにちゃんと払いだいなら、もっと単価上げないと先細るだげだろって言ってだの、ずっと。忠さんのだげじゃない、みんな。色々。
希穂　・・・。
寛　でもそれ言うどおめ、怒っからよ・・・。
希穂　・・・。
希穂　ま今賢太郎さん全部言っちまったげど。
寛　・・・。
希穂　お義父さんさ言っても、希穂のやりだいようにやらっせっちーだーっつって聞いでくんにぇえしよ。
寛　・・・。
一朗　だがら・・・。
希穂　・・・。
寛　寛くんは、杜氏んなる気ねえべした。
一朗　、それは・・・、
寛　役場さ務めでくっちぇんのは、とでも有り難いごどだよ。そんでも、よ。・・・うん。

間。

尾辻　だって、癌なんでしょ？
忠道　ああ？
尾辻　親方。
一同　！？（「え！？」など）
忠道　はあ？
賢太郎　あ違うぞ尾辻、

尾辻　ええ？
賢太郎　そういう意味ではない。
希穂　違う忠さんは
忠道　六代目、
希穂　あ、
忠道　癌ではねえ。
尾辻　や、・・・癌でもなくても、僕が、もっと勉強して、
賢太郎　そうだ、
尾辻　修行して、
忠道　百年早え。
尾辻　！
賢太郎　忠さん、
尾辻　百年早え百年早えって、何年待でば良いんですか！　何にも教えでくんねえじゃないですか！　俺ど希穂さん相談して新しい酒提案した時だって、無視だし！　俺やろうどすっこど全部否定すっぺした！　何なんすか嫌いなんですか！？
忠道　・・・おめさんはよ、
尾辻　はい、
忠道　何のために酒造っちいの？
尾辻　、え？　・・・。
忠道　己のためだべ？
尾辻　や、
忠道　言ってだべな、自分の造りっちい酒造りっちいって。
尾辻　、はい。
忠道　駄目なんだよ、それじゃ。
尾辻　何でですか！！　何が駄目なんですか！
忠道　・・・駄目だ。
尾辻　だがら、言って貰わんにど分がんないんですって！
忠道　言われねえど分がんねえ奴に酒造れっか！
尾辻　は？
忠道　米が喋んのが！？　麹菌が喋んのが！？
尾辻　！　喋りません！！
忠道　・・・五万年早えよ。
尾辻　・・・。

居心地悪そうな乾夫妻。顔を見合わせて、戻ってきて失敗したなあ、という顔。

尾辻　・・・火落ち菌出した杜氏に言われっちぐないっす。
忠道・一朗　！？
治　火落ち菌？
操子　シッ！
尾辻　酒蔵潰し。
治　え？
尾辻　杜氏殺し。
一朗　何でおめ、それ知ってんだ。

尾辻　え？
一朗　誰が言った。

尾辻、賢太郎を見る。
一同、賢太郎を見る。

賢太郎　え？　え何？

多紀、入って来る。神主の格好をしている。

多紀　ちょっと何やってんのー
賢太郎　あ、
多紀　お祓い始めっぞい！
治　ごめんなさい、
賢太郎　え？（多紀が神主？）
多紀　何、どしたの？
操子　やちょっと、
一朗　何でもねえよ。
多紀　何でもねえごどねえべしたー明らがに何かあった感じだべしたー。
一朗　、何もねえ！！
多紀　あら怖い。怖い怖い。本当は怖いお父さん。いやちょっと、みんな待ってっからー。
一朗　、ああ。
多紀　杜氏も蔵元も来ねえのに始めらんにってお祓い。
一朗　先やっとげ。
多紀　んな、先やっとげって、玄戸の人誰も居ないのに私は何をお祓うのよ！
一朗　そらそうだ。
多紀　ほら早ぐ。
希穂　（乾たちに）行ぐべ。
治　あ、
操子　はい！

治、操子、出て行く。
尾辻も出て行こうとする。

多紀　（尾辻に）あら何おめ、まだ吊ってねえの！？
尾辻　え？　あ、
多紀　だがらおめさんは使えねえって言われんだよ？　言われだごどもでぎねえのに言わっちぇねえごどやろうどすっから。
尾辻　！　あー・・・。
多紀　それ吊ってねがったらお祓いも何もあったもんじゃねえべしたもーこれだがら、この、もー、これだがら、役立たず！
尾辻　、吊ってきます。

尾辻、酒蔵の方へ去る。

多紀　まったぐ。
忠道　・・・俺行ぐわ。
多紀　うんー。
忠道　朝搾りの味変わっちまーがんな。

と、忠道、出て行こうとする。

多紀　ほら、賢ちゃんも！
賢太郎　え？
多紀　ナゴミウーメン待ってっぞい。
賢太郎　、は？
多紀　買い占めんでしょ？朝搾り。

忠道、希穂、一朗、寛、驚く。

賢太郎　え、や、は？　何それ。
多紀　しらばっくれっごどねえべしたー、ぜーんぶお見通しだよ？
賢太郎　え、え、え、え、何で？何で？
多紀　多紀さんのネットワーク舐めだらいげないよ。
一同　・・・。
多紀　？　なーにハトが鉄砲撃ったような顔してー。ほら、来(き)っせよ！　みんな待ってっかんね！　特に私が。来(き)っせよ！

多紀、出て行く。
希穂、忠道、一朗、賢太郎を見ている。

希穂　買い占めるって、何。
賢太郎　ぁえ？
希穂　うん。
賢太郎　、や。
希穂　何？
寛　そういうごど。
希穂　どういうごど？
寛　だがら、店さ並んだのぜーんぶ買い占めで、ナゴミで出すの。
希穂　は？
賢太郎　寛！
寛　もう良いでしょう！
希穂　え、何それ・・・。
賢太郎　・・・、徳一の、酒を、全国区にしたいの！
希穂　、馬鹿じゃないの？
賢太郎　・・・。
寛　悪い話じゃねえど思うげど。
希穂　・・・。

寛　この値段で卸してっからでぎっこどだよ。
希穂　・・・。
寛　徳一だがら、でぎんだ。
希穂　・・・・。

間。

忠道　・・・なあ、賢坊。
賢太郎　何。
忠道　変わんねっきゃ、なんねえのがなあ？
賢太郎　、え？
忠道　・・・値段も、味も、変わんねえがら良いんでねえの？
賢太郎　変わらなきゃ生き残れないんだ！
忠道　何で？
賢太郎　ええ？
忠道　生ぎでっぺした、オラだぢ。
賢太郎　そりゃ、今はね？今は、
忠道　火落ち出したげど、生ぎでるよ？　生ぎさして貰ってるよ？
賢太郎　・・・。
忠道　おめさんさは、何も言わね、言いっちぐねえがら黙ってだげどよ、結局、おめさんは、何がしっちいの？
賢太郎　、ええ？
一朗　忠さん、
忠道　ごめんね五代目。そんでもさ、ちっと、駄目だ。
賢太郎　何だよ。
忠道　(叫ぶ)余計なごどすんでねえ！！

一同、驚く。

忠道　賢坊。
賢太郎　、何。
忠道　おめさんは、何が変えっちい、何がしっちいっていう熱意があんのは凄く良ぐ分がる。伝わって来てるよ。しかしその、根っこっつうのがな、何で、そんなに何がしっちいのがが分がんねえ。何かしっちいっつうのは分がった。じゃあ、何でよ？　何でそんなに何がしっちいの？　それ教えで貰わんにぇえがな？
賢太郎　・・・家の、ために・・・。
忠道　何のため？　別に、おめさん来ながったら、こんな揉めでねえんだよ？　今年も、いづも通り美味い酒出来ましたーっつって、立春朝搾りして、穏やがに出荷し始めで、明日も搾って、毎日出荷して、四月に甑倒し(こしきだおし)するまで、滞りなぐ進むはずなんだよ？
賢太郎　・・・。
忠道　俺は、酒造るばっかりで、その、値段どが卸どが、金の話は良ぐ分がんねえげどよ、そんでも、今は、たーだ、五代目と六代目の邪魔してるようにしか見えねえよ？
賢太郎　・・・。

忠道　門前払い喰らわながっただけでも有り難いど思ってんの？
賢太郎　ええ？
忠道　勝手に出でって勝手に戻って来て、寝床貰えでるだけでも儲けもんだべ。五代目さ感謝しろ！！
一朗　良いんだそれは。
忠道　、んまそごは、五代目さ従うげっちょもよ。
賢太郎　・・・。
忠道　おめさん、変わんねっきゃ駄目だっつって、おめさんが一番変わってねえんでないの？
賢太郎　ああ？
忠道　たーだ希穂ちゃんの邪魔ばっかして。ガギの頃がら何も変わってねえべした。
賢太郎　・・・。
忠道　オラはよ、おめさんが継ぐもんだーど思ってだがら、何も言わねえでいだげどよ、そんでも、ちっと目に余んでないがい？
賢太郎　・・・。
忠道　希穂ちゃんがどんだげ頑張ったが、どんだげ苦しんでんのが、本当に分がってんのがい？
希穂　・・・。
忠道　女将入院して、世話して、五代目の代わりに酒の勉強して、家のごどもやって、子供こさえる暇さえねえんだぞ、
希穂　子供は関係無いよ。
忠道　関係あっぺした！　女性ホルモンっつうの？　そういうのもあんだべ何だが分がんねえげど、
希穂　忠さんも良いがら、
忠道　良ぐないよ、女には賞味、消費期限っつうのがあんだがら、
希穂　やめでって、
寛　忠さん、
忠道　ホルモンがなぐなっと、それはもう女とは呼べなぐなってしまうんだがら、
一朗　忠さん！！
忠道　・・・。
一朗　良いがら。
忠道　・・・良ぐねえって！　五代目だって我慢してんべした。
一朗　・・・。
忠道　ほら。・・・言ってやれって。
一朗　・・・。
賢太郎　・・・ただ、
忠道　あ？
賢太郎　ただ、ただ家のこと考えて何が悪いんだよ。
忠道　ああ？
賢太郎　親父に、お袋に、希穂に楽させてやりたいって思って何が悪いんだよ！！
忠道　・・・。
賢太郎　やっと、やっと・・・、思ったのによ・・・。
忠道　・・・。
賢太郎　なんで・・、なんで俺が頑張っても、誰も受け入れてくんないんだよ！
希穂　・・・、頑張ったら結果出るって思うのが間違いでしょ。
賢太郎　ああ？

希穂　頑張っても頑張ってもどうしょうもねえごどだってあんだよ！
寛　・・・・。
賢太郎　・・・・。
希穂　・・・お兄ちゃん音信不通んなって、杜氏も育ってなぐって、東京の内定蹴って実家さ就職して、お母さん調子崩して、お父さんに「継いでくろ」っつわっちぇ、そんで、そんで、私は何を頑張れば良がったの？
賢太郎　・・・・。
希穂　お兄ちゃんみだいに、この蔵捨てれば良がったの？　ねえ。
賢太郎　・・・・。
希穂　蔵元杜氏んなって頑張る他に、どんな道があった？　ねえ、教えでよ。ねえ。・・・ねえ！

間。

希穂　見舞いさ行っても、お母さん、お兄ちゃんの話ばっかりなんだよ・・・。
賢太郎　？
希穂　寛くんだってそうだよ。お母さんもう誰が誰が分がってないがら、寛くんのごどお兄ちゃんだと思って話し掛げでんだよ？
賢太郎　え？
寛　・・・・。
賢太郎　・・・そうなの？
寛　や、
希穂　そうだよ！　そんでもこの人、黙ーって、作り笑顔浮かべてくっちぇんの。
賢太郎　そうなんだ・・・。
希穂　挙句、こないだお見舞い行ったら、私何て言わっちゃど思う？
賢太郎　？
希穂　「あら綺麗な人だごどー。賢太郎の奥さん？女優さん？」って。
賢太郎　・・・・。

希穂、嗚咽。

希穂　・・・私には、もう、この蔵しかないの！　だがらもう、邪魔しないで！
賢太郎　邪魔なんて・・・、
希穂　邪魔だよ！！
賢太郎　・・・・。

沈黙。

寛、希穂をさすろうとする。
希穂、その寛の手を振り払う。

多紀、いつの間にか戸口に立っている。

多紀　・・・おい、蔵人たち。
寛　あ、

多紀　酒と内輪揉め、どっちが大事なんだ。
一朗　・・・。
多紀　私は早ぐ、飲みっちんだ。飲めないなりに。
忠道　行ぐ行ぐ。行ってろ。
多紀　・・・。

多紀、出て行く。
忠道、入口へ向かうが、ふらついた。が、体勢を立て直し、振り返り、

忠道　・・・うぢの酒は、・・・今、美味いが？
希穂　、美味いよ。
忠道　良がった
賢太郎　、ちょっと待って何、どういうこと？
忠道　・・・。
一朗　飲めねえんだよ、もう。γ-ＧＴＰ上がっちまうがら。
忠道　え？
希穂　お父さん、
賢太郎　それって、
一朗　肝臓だ肝臓。レバー。
忠道　五代目、何で、
一朗　・・・。
忠道　俺言ってねがったのに。・・・！（希穂に）言っちまったの！？
希穂　言ってない！
一朗　・・・分がってだー。
忠道　・・・。
一朗　目、霞むんだべ？
忠道　・・・(一朗に)すんません、黙ってで。
一朗　最初っから気付いでだよ。
忠道　・・・。
一朗　手、震えでっぞい。玉串落どすなよ。
多紀(声)　早ぐ飲ませろー！

忠道、出て行く。

賢太郎　・・・飲めないの？　もう。
一朗　・・・。

希穂、出て行こうとする。が、立ち止まり、

希穂　はあっ！
寛　ん？
希穂　こんな顔で出らんにぃ縁起悪ぃ。

間。

希穂　私だってさ・・・、安いどは思っていだのよ？
賢太郎・寛　え？
一朗　おい、
希穂　そんでもさ・・・。忠さんがさ・・・。忠さんがさ・・・。
賢太郎　何。
希穂　・・・俺の給料減らしても良いがら、値上げはすんな、って。
賢太郎　え・・・？
希穂　じゃないと、四代目に顔向けでぎねぇって。
賢太郎　何そのこだわり。
希穂　知らないよ！！　知らないげどそうなんだもん！　そうだっつったら曲げねえんだもん・・・。
賢太郎　ああ・・・。
寛　・・・お義母さん生ぎでるうぢは変わんねえど思いますよ。
賢太郎　え？
寛　、お義母さんさ飲ませっちいんだ、あの人。
希穂　ああ、そうが・・・。
賢太郎　誰の？忠さんの？
寛　先輩の。
賢太郎　え、何それ。
一朗　別に、何がどうこうっていうんでもあんめえげど、
寛　好ぎなんだ。
賢太郎　え？
一朗　、うん。
希穂　ああ。
寛　ただ、好ぎなんだ。
希穂　そっか・・・。
賢太郎　お袋？
寛　だがらずっと独身なんだよ。
賢太郎　えー・・・。
希穂　・・・そうやってさ、この人に飲んで欲しいって、この人に、本当に美味い酒飲ませたい、って思える人が居っから、頑張れんのがもね。売れるどが売れないどがじゃなく、ただ純粋に、頑張れんだよね。
賢太郎　・・・。
希穂　祖父ちゃんがなんだかんだって言ってっけどさ。
寛　うん。
希穂　お兄ちゃんだって、そうだったんでないの？
賢太郎　へ？
希穂　映画。
賢太郎　ああ、
希穂　色んな人に観で欲しいっついながら、いっちばん観せだい人居だんでないの？
賢太郎　あー、んー・・・。
希穂　誰。
賢太郎　居ない、な。

希穂　居ないわげないよー隠すごどねえべした今更。
賢太郎　いや、ほんとに、居ない。
希穂　え、
賢太郎　そういう人は。
希穂　・・・。だがらが・・。
賢太郎　え？
希穂　何でもねえ。
一朗　ま、自分で飲みっちいだげがもしんにぇえげどな(笑)
希穂　それもあんな(笑)
寛　、そんだげではないよ、あれは。
希穂　ええ？
寛　そんだげでは、ないよ。
希穂　・・・そう。
寛　うん。

間。

賢太郎　・・・親父。
一朗　ああ？
賢太郎　うん。親父だ。強いて言えば。
希穂　観せっちがった人？
賢太郎　、うん。
一朗　・・・そうが。
希穂　・・・。
賢太郎　お前は？
希穂　私？
賢太郎　うん。
希穂　私は・・・、売る人間だがらなあ・・・。造んのどは、またちっと違うんだよなあ・・・。
賢太郎　それズルくね？
希穂　だって、
寛　じゃ誰に買って欲しいの。
希穂　え？
寛　うん。誰。
希穂　・・・お兄ちゃん。
寛　！？
賢太郎　俺買うわけないじゃん(笑)
希穂　って言うど思った？
賢太郎　え？
希穂　バーカバーカ！(笑)
賢太郎　・・・。

尾辻、酒蔵の方から入って来る。杉玉を吊り終えたようだ。

一同　？

尾辻　吊りました！
一朗　ああ、
尾辻　お祓い終わっちゃいました？
一朗　まだだ。
尾辻　間に合った！

と、尾辻、慌てて出て行こうとする。

多紀、入って来る。

多紀　救急車！　救急車！
一同　！？
希穂　何？
多紀　ぶっ倒っちゃだー！
希穂　誰？
多紀　忠さん！！
一同　！？
尾辻　親方！！

尾辻、真っ先に駆け出していく。
希穂、一朗、も出て行く。
多紀、室内の電話に向かう。

賢太郎、動けない。

暗転。

●7．狂奔　甑倒し(こしきだおし)

三月末。
立春朝搾りは、忠道が低血糖に寄り倒れたことで、バタバタの中終わった。
折角の縁起物の日に、縁起の悪いことが起こったせいで、「今年は遠慮しようかな」と、遠回しに何軒かの卸先から断られてしまった。

田知本が一人、待っている。

奈緒美、大荷物を抱えて訪れる。

田知本　あ。
奈緒美　あ・・・。
田知本　よくお会いしますね。
奈緒美　田知本さん？
田知本　はい。
奈緒美　でしたっけ？
田知本　ええ。お元気ですか？
奈緒美　いえ。
田知本　、あそうですか。
奈緒美　どうなすったんですか？
田知本　、ま、仕事で？
奈緒美　ふうん。
田知本　ええ。
奈緒美　お好きなんですね。
田知本　え？
奈緒美　賢太郎君。
田知本　は？
奈緒美　じゃねがったらそんな頑張んないもん。
田知本　は？
奈緒美　・・・うん。
田知本　・・・私は、お客さんのために頑張ってるだけですよ？
奈緒美　ん？
田知本　私が選んだお酒を呑んで、笑顔になって貰うために頑張ってるだけですんで。
奈緒美　それはつまり、自分だけのために頑張ってるっつうごどですか？
田知本　だから、お客さんのためですって。
奈緒美　自分のためだけに頑張るのって、楽しいんですか？
田知本　何なんですか？
奈緒美　映画だって、役者足りないがらじゃなぐって、自分が出たいがら出ただけなんでしょ？
田知本　もう何なのあんたいきなり。
奈緒美　奈緒美です。
田知本　いや知ってっけどさ。え何、私の失敗笑いに来たの？
奈緒美　そんな暇じゃありませんけど。
田知本　、じゃ何？

希穂、酒蔵の方から入って来る。

希穂　はいー。ごめんなさいお待たせしちゃって。
田知本　あ、すいませんお忙しいところ、
奈緒美　こんちは希穂ちゃん。
希穂　？　え？（何故一緒に？）
田知本　うん関係無いからこの人は。
希穂　え？
田知本　あの・・・、ご存知かもしれませんけれども、
希穂　不味かったでしょう？
田知本　え？
希穂　立春朝搾り。
田知本　え、あの、それなんですけれど、
希穂　はい。
田知本　ご報告で。
希穂　何でしょう。
田知本　すみません、随分と掛け合ってはみたのですが、
希穂　駄目でした。
田知本　、はい・・・・。ごめんなさい。折からの業績もあり、店舗数も削減の方向で動いている今・・、味は、決して悪くなかったと思うんですけど、
希穂　悪いですよー！
田知本　え、
希穂　飲んだんでしょ？
田知本　、はい。
希穂　じゃ分がんじゃないですか？
田知本　・・・すいません。
希穂　・・・いや、気にしねえでください。自分とごの酒の味は自分が一番よぐ知ってますんで。それに、立春朝搾りは日持ぢしねえんです。火入れしてないがら。
田知本　ええ、
希穂　だがら買い占めてくださったってのは、有り難い、まびっくりしましたげど、何やってんだおがしなごどやってんなーって思いましたげど、有り難がったんですけど、んな、運んでるうちに発酵進んじゃって、一週間もしねぇうぢに老ね香(ひねか)出っちまうがら飲めだもんじゃねえのになーって、もったいねえなーって、思ってました。あは(笑)
田知本　・・・ええ、びっくりしました。
希穂　お買い上げ、誠に有り難うございました。
田知本　・・・。
希穂　それに、一回車で運んだのもう一回車で運んで、そんでそっから東京さ送ったんでしょ？
田知本　はい。
希穂　そんなん、酒が疲れっちまいますよ。
田知本　疲れ？
希穂　、日本酒仕入れでんのに疲れも知らねえんですか？
田知本　、すいません浅学で。その、疲れっていうのは、
希穂　自分で調べだらどうですか。

田知本　・・・すみません。
希穂　飲んだら分かりますよ。この町で買って飲んだ生酒、東京で買って飲んで見らんしょ。
田知本　・・・。
希穂　あ、お兄ちゃんさも何かありますか？
田知本　あ、いえ。
希穂　(酒蔵の方に)お兄ちゃーん！　「ナゴミ」の人帰るってー！
田知本　すいません失礼します。
希穂　え？　ほら帰るってよー！

田知本、足早に退散する。
賢太郎、酒蔵の方から入って来る。徳一酒造の作業着を着ている。

賢太郎　何？
奈緒美　やっほー。
希穂　「ナゴミ」の人。
賢太郎　（奈緒美を見て）？　違うよ?奈緒美この人は。
希穂　今今、外！
賢太郎　え？

と、賢太郎、外へ出て行こうとする。
尾辻、酒蔵の方から入って来る。

尾辻　賢太郎さん！
賢太郎　ああ？
尾辻　アル添は？
賢太郎　しない！
尾辻　え、そしたら酵母が、
賢太郎　限界まで発酵させろ。
尾辻　甑倒しですよ今日！
賢太郎　別に明日でも良いだろー！

賢太郎、出て行く。

尾辻　、大丈夫っすかね？
希穂　ええ？
尾辻　やったごどないっすよこんな長期発酵。
希穂　良いんじゃない？
尾辻　でも、火入れもしないって。
希穂　それ私のアイディアね。
尾辻　やでも、んなごどしたら、
希穂　自分で思い付いたみたいな顔してだげどそれ、
尾辻　でも、火入れしねがったら、老ね香が、
希穂　面白えべした。老ね香整えてヴィンテージ風味。
尾辻　ワインじゃないんですから、

希穂　ワインほど簡単じゃねえべ。
尾辻　そうですよ。だから温度難しいんですよ、普通にやってだら絶対美味くなぐなりますから。
希穂　(笑)
尾辻　、え？
希穂　転んでもただじゃ起ぎねえんだー。
尾辻　ん？
希穂　良いべ、やらしてくれっぺ。やりたいどごまで。忠さん居だら絶対出来ねえべ？
尾辻　まあ、そうですけど。
希穂　やりっちがったんでしょ？
尾辻　賢太郎さん？
希穂　尾辻くんも。
尾辻　、や、その、はい。
希穂　(笑)
尾辻　、はい。
希穂　身を持って知れば良い。
尾辻　、うわー。
希穂　昔っからそうなんだ、あの人は。何か見っけだらそればっか。私がおもちゃ貰っても、取っかして遊んで。人形すら奪って、一人でままごどやってだんだよ？
尾辻　、へえ。
希穂　変わんねえ。なーんも。
奈緒美　ね。
希穂　？
尾辻　じゃあ、蔵は・・・、
希穂　ここは渡さないよ？
尾辻　！
希穂　変えねえ。
尾辻　はい。
奈緒美　お酒造ってるんだ。
希穂　、え？
奈緒美　ね。
希穂　ああ、新しい酒造んですって。
奈緒美　へえ。
希穂　最後の仕込み、取っかして。肝臓に優しい、今までにない酒造んだど。発酵と熟成で。酒の時点で肝臓に優しいも何もねえのに(笑)
奈緒美　ナゴミに？
希穂　え？
奈緒美　はい。出荷する？
希穂　違いますね。
奈緒美　？　じゃあ、
希穂　忠さんに、飲ませっちんだど。
奈緒美　、忠さん？
希穂　ん？
奈緒美　どなた？

希穂　、あ、そっからが・・・。
奈緒美　え？
希穂　そうだよ、そんな美味いんだが美味ぐないんだが分がんない酒仕入れでくれだら良いのにねナゴミ。
尾辻　ああ、
希穂　しかし、肝臓に優しい酒って。酒屋の発想とは思えない(笑)
尾辻　(笑)

賢太郎、戻ってくる。

希穂　間に合った？
賢太郎　駄目だ、すげえ速さで雪道発進してった。
希穂　そう(笑)
尾辻　賢太郎さん、今やっちまわねえど、
賢太郎　お前何目離してんだよ！　目離すなよ！
尾辻　あ、すいません！

尾辻、酒蔵に去って行く。

賢太郎　・・・、ちゃんとしてるよ？あいつ。
希穂　え？
賢太郎　みんな忠さんばっか見てたから不満だったろうけど、もともとゼロだと思えばさ。あとは、上がるしかない。
希穂　それ褒めでんの？(笑)
賢太郎　ちゃーんと基礎もあるしアイディアもあるじゃん。
希穂　そう。
賢太郎　経験だけがないだけで。そりゃそうだよ、経験させなきゃ経験ねえもん。
希穂　、そうだね。
賢太郎　これ、お前の問題でもあるかんな。
希穂　はいはいそうですね。
賢太郎　・・・。お前に、飲んで欲しいんだってよ。
希穂　え？
賢太郎　(笑)

賢太郎、去ろうとする。

奈緒美　賢太郎くん！
賢太郎　何だよー！
奈緒美　・・・。
賢太郎　何？　ていうか、何してんの？
奈緒美　私、離婚すんだー。
希穂　！？
賢太郎　・・・うん、何で今そんな爆弾発言？
奈緒美　・・しばらく、こごさ置いて貰えないがな？

賢太郎　？（希穂を見る）
希穂　？（首を捻る）
奈緒美　駄目？　かしら。
賢太郎　実家すぐそこでしょうよ。実家帰れよ。
奈緒美　・・・。
賢太郎　じゃね。

賢太郎、酒蔵に向かっていく。

奈緒美　（希穂を見て）（笑）
希穂　（苦笑）
奈緒美　どうしよう。
希穂　、どう、しましょうねえ。

奈緒美、荷物を置こうとする。

希穂　無理ですようぢは。
奈緒美　・・・。
希穂　はい。

操子、治、玄関から入って来る。今日は私服だ。
操子の手には、大きな段ボール。

操子　どうもー。
治　こんちはー。
希穂　あらこんちはー。
奈緒美　・・・。
治・操子　、どうも。
奈緒美　（苦笑）
治　順調ですか？
希穂　ううん、まだあーだこーだやってるみだいよ。
治　あそうですか。
希穂　うんー。
治　でも、僕らの米で、新しいお酒が出来るって思うと、ねえ？
操子　偶然でも。
希穂　良過ぎだがらね。
治　嬉しいです
操子　あの、これ。
希穂　はい？

操子、段ボールを差し出して、

操子　フキノトウ。
希穂　え？（と、受け取る）こんなに！？

治　実家から届きまして。
希穂　実家って東京の？
操子　はい、家庭菜園。
希穂　マンション？
操子　屋上の。あとタラノメも入ってたんで、一緒に、
希穂　、へぇーー！！
操子　食べ切れないんで。
希穂　あ、へぇーーー。ありがとうございますー。
操子　天麩羅にすると美味しいんですよ。
希穂　ええ知ってます、へぇーーー。
操子　んじゃ。

操子、帰ろうとして、

希穂　あ、
操子　搾る時、呼んでください。
希穂　はーい。
操子　もう、すーぐ駆け付けますから。
希穂　あ、もう今日明日ですよ？
操子　え？
希穂　はい。ま素人のやるごどなんでどうなるが分かりませんけど(笑)
操子　ああ、(治に) じゃ種もみ延期する？

治、奈緒美をしげしげと見ていた。
操子、治を叩く。

操子　何見てんの。
治　え、や。(奈緒美に) 進展ありました？
奈緒美　え？
操子　何の？
治　え、や、
奈緒美　難しいね、人って。
治　(笑)
操子　・・・何？
治　ううん。
操子　行くよ。
治　うん。
奈緒美　良いですね。
操子　え？
奈緒美　私も、操子さんみだいに出来れば良がったんですけど。
操子　へ？
奈緒美　いえ。良いですね、悩みなさそうで。
操子　・・？？　ありますよ？
奈緒美　・・・。

操子　無い人なんて居ないと思いますけど。
奈緒美　・・・。

奈緒美、何も言わずに去る。

操子　、何あの人。
希穂　さあ(笑)

蔵の方から、賢太郎の声が響く。

賢太郎(声)　よっしゃ搾るぞー！！　希穂ー！！
希穂　あ、
治　お、
希穂　やるかー。
操子　いよいよ？
希穂　手伝って、貰えます。
操子　言い切りましたね。
希穂　よね？
治　あ今日ちょっと、
操子　もちろん！　ね！
治　あ、あうん。
希穂　よし。行ぎましょ！
操子　はい！
希穂　尾辻くんさ任せておげないでしょ？
操子　ね！
治　ん、まあ。

などと言いながら、希穂、操子、治、酒蔵へ向かっていく。

溶暗していく。

暗転寸前に、多紀、入って来る。随分変な髪型になっている。

多紀　こーんちはまだやらっちゃよポワソン誰も居ねえ！

暗転。

●8．九献　皆造り(みなつくり)

四月初旬。午後。
蔵の軒先では、杉玉が色付き、茶色くなっている。
一朗、伝票を整理している。
卓上には、ラベルの貼られていない一升瓶。
寛、入って来る。大きめのボストンバッグを持っている。

寛　ただいま。
一朗　お帰り。

寛、荷物を置いて、また出て行く。
一朗、立ち上がって、玄関を見ながら待つ。
寛と希穂に付き添われるように、忠道、入って来る。退院してきたのだ。

忠道　・・・。
一朗　お帰り。
忠道　・・・ただ今、戻りました。
一朗　うん。
忠道　(寛と希穂に)どうもね。もうさすけね。
寛　・・・車、小屋さ入れできます。

と、寛、出て行く。

忠道　うし、失礼します。
一朗　うん。

忠道、荷物を置きに室内へ入っていく。

一朗　・・・どうだった？
希穂　週七回休肝日設げなさいって。
一朗　ああ、
希穂　つまり、飲むなって(笑)
一朗　そうが。・・・いや、
希穂　ん？
一朗　お母さん。
希穂　・・・。元気だったよ。忠さんのお酒飲みでぇなーって。
一朗　・・・そうが。
希穂　お兄ちゃんは？

一朗　営業だど。尾辻君に運転させで酒屋回ってる。
希穂　そう。

忠道、戻って来る。

間。

忠道、蔵の方を気にして、

忠道　甑倒ししたの？
一朗　うん。
忠道　誰搾ったの。
希穂　みんなで。尾辻くんが先陣切って。
忠道　尾辻が？
希穂　うん。
忠道　・・・ちゃんと搾らっちゃの？
希穂　うん。何とか？
忠道　、そうが。
一朗　・・・。
希穂　やっぱ忠さん居ないと、不安？
忠道　(苦笑)
希穂　寂しかったよー。
忠道　申し訳ねえ・・・。
希穂　でも味は、大丈夫。ちゃんと、私チェックしたがら。
忠道　・・・搾れだんなら、まあ、良がったのがなあ。

一朗、忠道に座るよう促し、日本酒用のグラスを差し出す。

希穂　お父さん。
忠道　何？
一朗　・・・。
忠道　俺飲まんにだって。

一朗、一升瓶を開け、グラスに注いでいく。

一朗　希穂と尾辻と、賢太郎が造った酒。
忠道　・・・。
一朗　朝搾りの残り、もっと発酵させで、アル添も火入れもしねえで熟成させだんだど。
忠道　・・・。
一朗　忠さんが、後回しにした米がら造ったんだど。
忠道　・・・申し訳ねえ。
一朗　忠さんに、飲んで欲しいんだど。
忠道　・・・。
希穂　まだ、とっかされっちまったよ・・・(笑)

忠道　・・・。

忠道、香りを嗅ぐ。

寛、入って来る。

寛　！！

希穂　良いの！！

忠道　・・・。

忠道、思い切って飲んでみる。空気と一緒に吸い込み、蔵人独特の味わい方で。
一度渋い顔をする。しかし、すぐに驚く。やがて、笑みが浮かび始める。
じっとグラスを見詰めている。もう一口啜る。やはり渋い顔、そして笑み。

忠道　何だこの酒。

希穂　・・・。

忠道、グラスを差し出す。
一朗、酒を注ぐ。

一朗　これで、皆造りだ。

忠道、注がれた酒を、今度は少し勢いよく飲む。

忠道　・・・不味い。

忠道、残った酒を飲み干し、もう一杯、と一朗に要求する。
一朗、無言で注ぐ。
忠道、一口飲む。

忠道　まっずい酒だよ。

忠道、飲み干す。

忠道　誰が造ったんだが・・・。

忠道、嬉しいのか、寂しいのか、美味しいのか、酔っ払ったのか、何故か、涙が溢れ出す。
一朗、無言で注ぐ。

――幕――